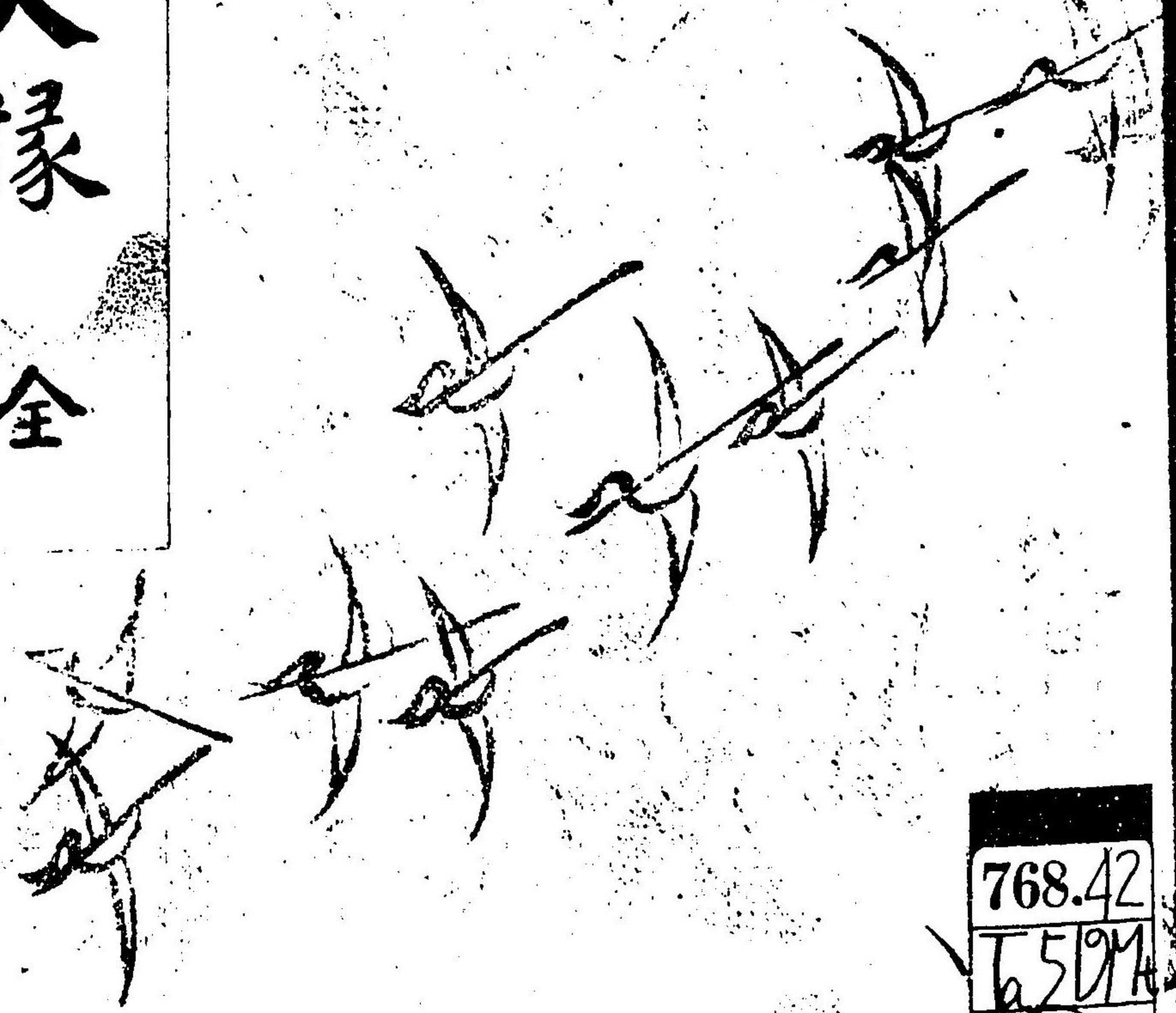


竹本搨津大塚

全



768.42

650A

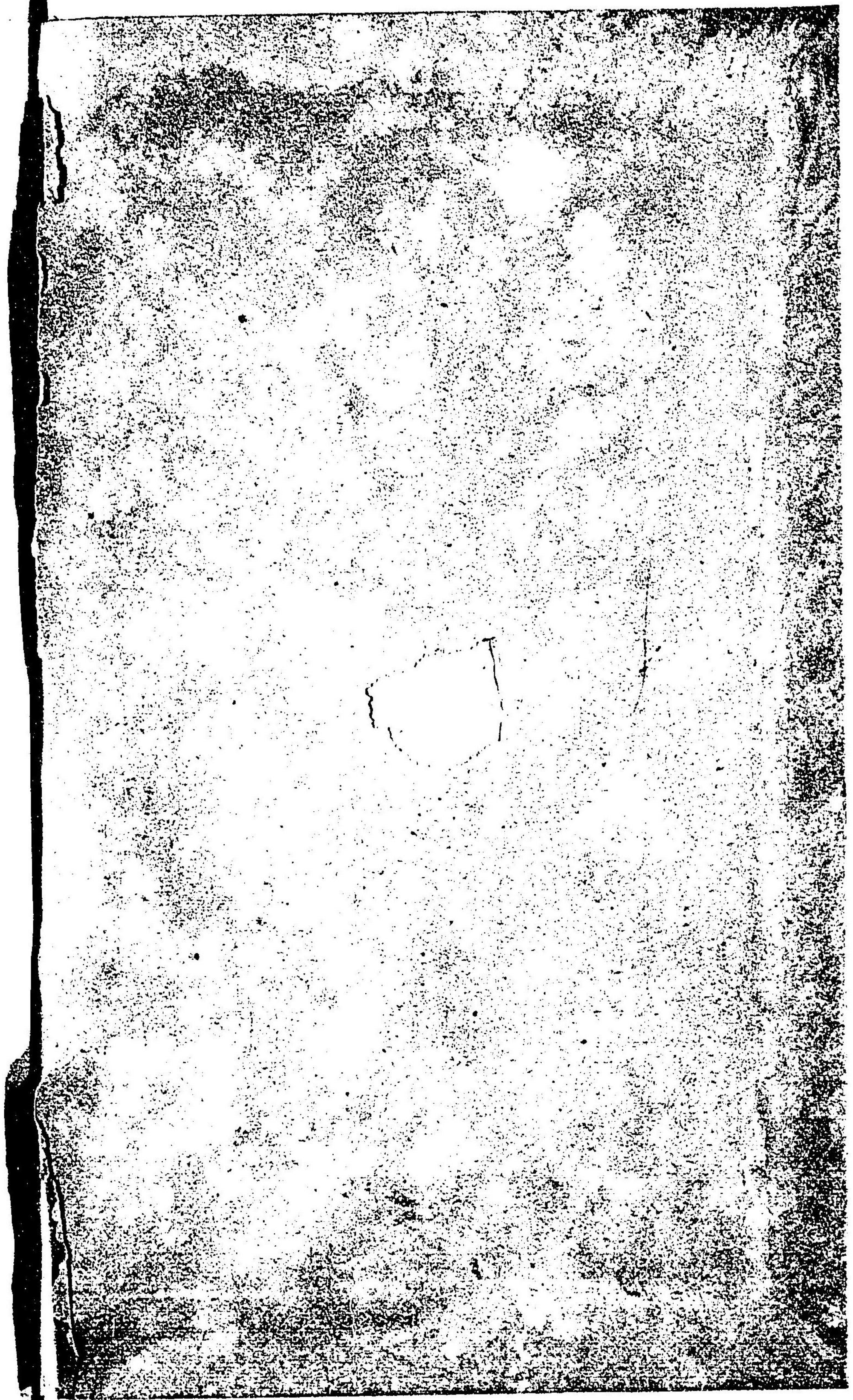
(S)

水谷不倒著

竹本攝津大塚

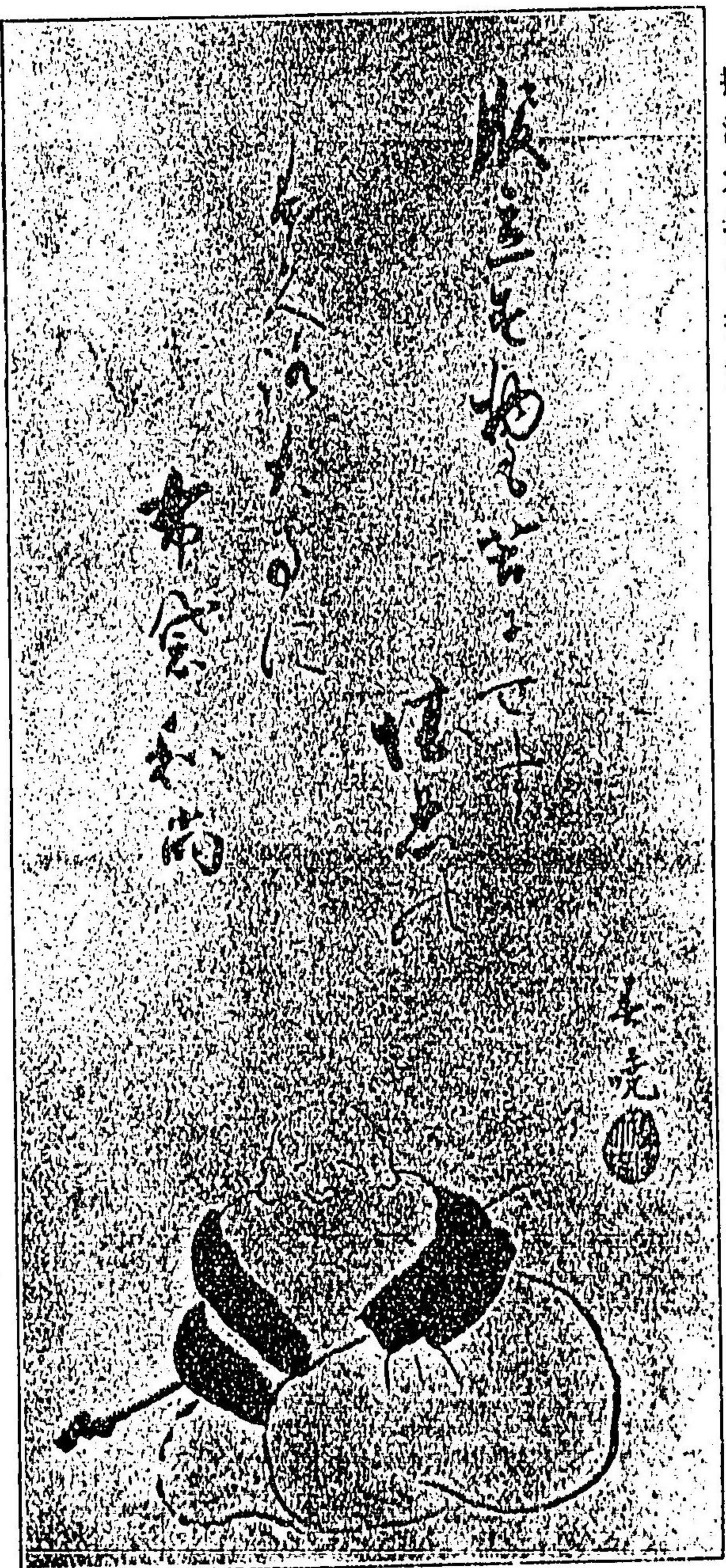
二代目越路太夫

東京博文館藏版





攝津大掾白書讀

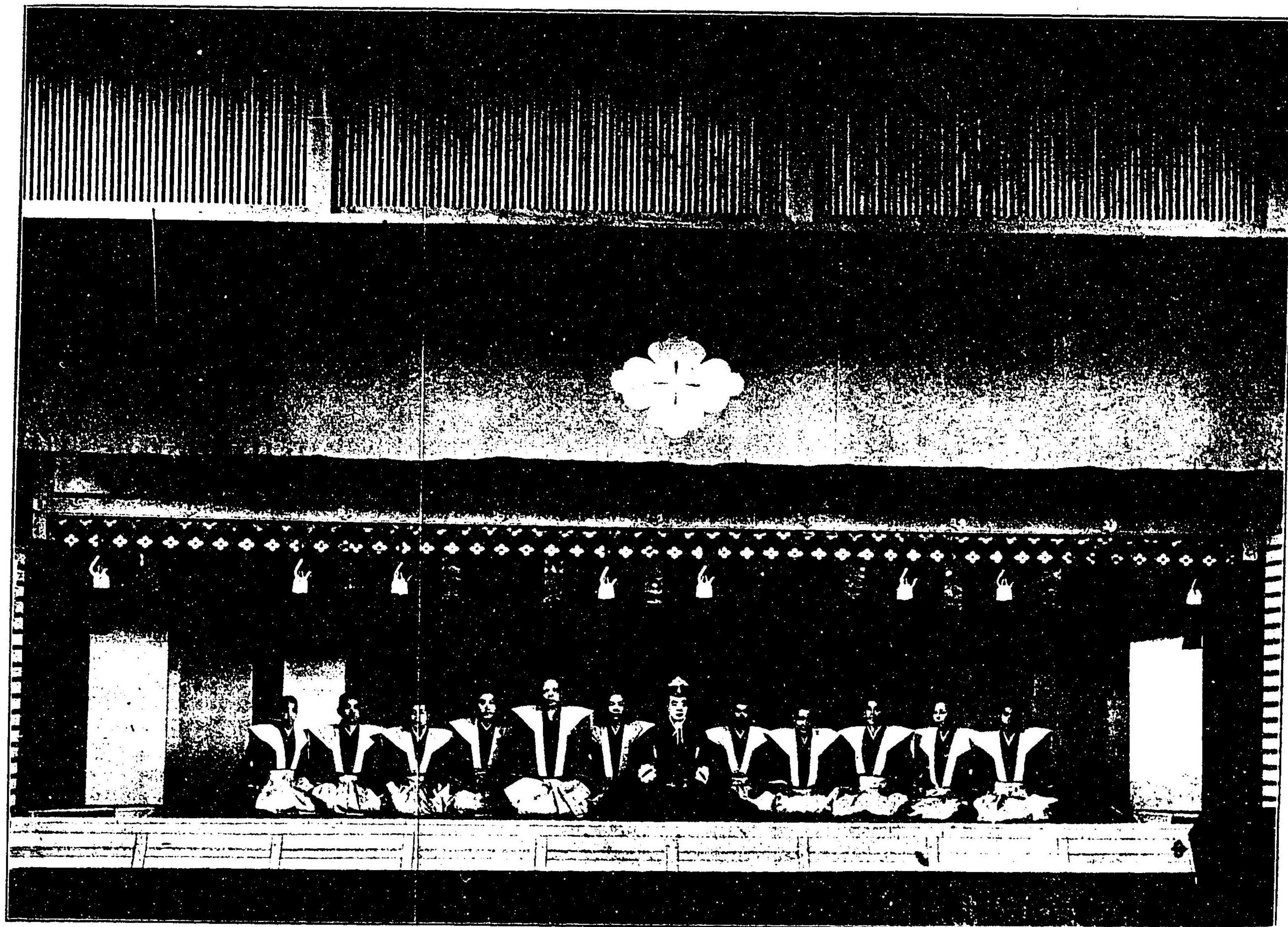




(影攝氏村光貞卿) 子かた女妻



(撰背の歳八十六) 掾大津崎本竹



(影撮氏村光戸神)

圖の露披名改掾大津攝座樂文阪大月五年六世治明

## 緒言

經濟學者として歴史家として知られたる某博士は、曾て大阪に來  
 遊し大阪紳士の催せる宴席に臨み、西鶴を談じ、越路(攝津大掾)を激  
 賞したりと聞く。蓋し博士が大阪人に對し、振時きたる愛嬌なる  
 べしといへども、元祿に西鶴の如き文豪あり、義太夫の流れを汲め  
 る攝津大掾の今日に健在するは、實に大阪人の文藝界に立ちて、肩  
 身の廣きところなり。  
 道頓堀の櫓は高し、五座の芝居は賑へり。歌右衛門、仁左衛門等の  
 系統は敢て絶えたるにあらず。片岡の嫡流に我當あり、中村派に  
 雁治郎、福助あり、市川の支流に右團治ありて、大阪の梨園決して人  
 なきにあらずといへども、而も今の大阪歌舞伎を見て、雁我、右福等  
 のあるを以て、大阪人の前に世辭として賞揚するは、褒める者も褒  
 めらるゝ者も共に聊か耻しき心地すべし。よしや大阪に來り、歌

舞伎芝居を見ればとて、智あるものは之を公言せざるべし。ひとり御靈文樂座に至りては、高きも卑きも紳士も淑女も政治家も學者も、苟も文藝に興味を有するものは、之を見ざるを以て耻辱とし、喋々之を談じて人後に落ちざらんとす。蓋し攝津大掾の如きは、眞に近世に於る聲曲界の名人なるが故なり。

予久しく大阪に在り、常に此天才を傳せんと欲す。然れども未だ機會を得ざりし所、昨年大暑の候、たま〜數日の閑を得たるの時、文樂も亦暑中休業に際したれば、一二回大掾に面して其經歷を尋ね、彼れ自記の藝題録及び最近五六年間に於る文樂座の興行を調べ、暇ある毎に筆を起し、漸く十一月に至りて稿を脱し、此編を成す。然れども誠に倉卒の業にして、殆ど推敲するの違だになし。恐らく不備の點少なからざるべしといへども、又以て攝津大掾が生涯の事蹟と、文樂座に於るほゞ五十年間の興行一斑を窺ふに足

るべし。

明治三十七年一月

著者識す



凡例

一 淨瑠璃の流派一にして足らず、常盤津、清元、一中、新内、大薩摩、河東  
 みなこれを稱して淨瑠璃といふべく、ひとり義太夫節の其名を  
 専らにすべきにあらざるも、今日最も廣く行はるゝは義太夫節  
 にして他之に及ぶものなし、殊に大阪に於ては、義太夫節の根源  
 地にて其流行は最も盛んにして、之が爲めに殆ど他流を容れず、  
 故に義太夫節をさして直ちに淨瑠璃と稱す。書中淨瑠璃とい  
 ふは皆此大阪の呼稱によれるものにして、東京の所謂義太夫節  
 なり。

一 攝津大掾は最初南部太夫と稱し、次に越路太夫と改名し、此名最  
 も人口に膾炙せり、明治卅六年の春六世春太夫の名を襲ぎ、後直  
 ちに故小松宮殿下賜ふ所の攝津大掾と改む。故に書中一般に  
 亘れる場合には、現在の名を記し、其部分くを指すには其時々

の名を用ゆ。

一本書の目的は文藝家の事蹟を後世に傳へんとする、わが豫ての事業の一部分なり。されば事を叙するには趣味あらんよりも、事實の正確を基とせり。故に書中記する所うるさきまでに年月日を附せり。興行に關する事柄は凡て五十年來の淨瑠璃番附によりて得たるものにして、なほ番附面と實際とは往々にして相違あるものは、一々大掾の記録によりて正したるものなれども、匆卒の著にして誤謬なきを保せず、そは大方諸君の教へを俟ち、他日更に訂正する時あるべし。

一書中挿む所の寫真中、攝津大掾改名披露の圖、攝津大掾及び妻たか子の肖像は、神戸なる光村利藻氏が、特に大掾の爲めに撮影して大掾へ寄贈せられたるものなり。

一本書を編するに當り、文樂座の支配人渡邊幸次郎氏の盡力に依

りしもの頗る多し。又攝津大掾以外の事に關しては、木谷傳次郎氏、竹本彌太夫、井上重吉氏、竹本大隅太夫等を煩したるとも少なからず。是等著者の爲めに便利を與へられたる諸君には、著者の深く感謝する所なり。

目次

- 其一 淨瑠璃畧系圖……………一  
△竹本春太夫の傳統△春太夫代々の略説△五代目春太夫の逸事△攝津大掾は其六代目
- 其二 天保嘉永の聲曲界……………九  
△掉尾の全盛時代△名人上手の輩出
- 其三 幼名吉太郎……………一四  
△歌舞伎役者は門閥△淨瑠璃の太夫は出來星
- 其四 養父伊八の素人淨瑠璃……………一八  
△大阪に於る素人淨瑠璃一斑△三味線の稽古
- 其五 藝人の決心を固む……………二五  
△初めて江戸へ下る△日光街道の窮迫
- 其六 三代目野澤吉兵衛……………三〇

- 其七  
△初めて南部太夫と名乗る△最初の旅稼ぎ△江戸の大修業  
△越路太夫と改名△吉兵衛の死去と歸阪  
春太夫の訓誡……………四三
- 其八  
△越路の小不平△越路大阪を去らんとす  
出世の端緒……………四九
- 其九  
△文樂座の出勤△先輩の代り役△好評噴々  
維新の變革……………五五
- 其十  
△九州へ旅稼ぎ△荷物の延着△長崎の大窮迫  
越路の昇進……………六二
- 其十一  
△文樂翁菅原配所の段を新作して越路に授く△竹本染太夫  
の死去△豊竹湊太夫櫓下となる  
文樂の松島移轉……………六六
- 其十二  
△豊竹湊太夫の退隱△竹本春太夫吉田玉造櫓下となる  
春太夫と文樂座の衝突……………七二

- 其十三  
△春太夫と團平の一派文樂を去る△越路獨立して文樂に據  
る△春太夫の退隱△竹本實太夫櫓下となる△越路山科の段  
を語る△團平越路を彈ぐ  
太夫としての越路の地位……………八一
- 其十四  
△三都太夫三味線人形番附の位付  
越路の大流行……………八六
- 其十五  
△旅稼ぎに忙殺△九州四國巡り△高知行の奇談  
越路の全盛期……………九七
- 其十六  
△越路櫓下となる△御靈文樂座の開場△團平文樂を去る  
第二の故郷へ錦衣の越路……………一〇六
- 其十七  
△文樂大一座の東京乗込二度目三度目の上京△東京の大人  
氣  
淨瑠璃の上に活歴風の流行……………一二六
- △團十郎が活歴の影響如何△心ある人の忠告△越路の熱心

○其十八 越路の競争者豊竹古鞆太夫……………一三〇

○其十九 生涯の光榮ある部分……………一三四  
△故小松宮殿下の令聞に達す△高野山の忠魂碑建設△竹本攝津大掾の名を賜ふ△七十五日間の大興行

○其二十 最近の興行……………一四八  
△最近三年間の興行概況△五代目吉兵衛△大掾と文樂座との關係

○其廿一 彼れの藝談……………一六一  
△今の藝は浮氣△長門太夫の湯を呑む印△岡太夫の豪放論  
△音聲以外に語る術

○其廿二 語り物の種類……………一七二  
△最も得意の語り物△彼れの長所と短所

○其廿三 傳受の巻……………一七八

四

○其廿四 苦心談……………一九三  
△攝津大掾が門弟に與へたる訓誡△彼れが門弟の重なるもの△三代目越路太夫

○其廿五 藝人としての三徳……………一九八  
△第一聲△第二容貌△第三性格

○其廿六 彼れの家庭……………二〇四  
△二見の妻女たか子△大掾が平常の行△座員の悦服

○附竹本攝津大掾興行年表

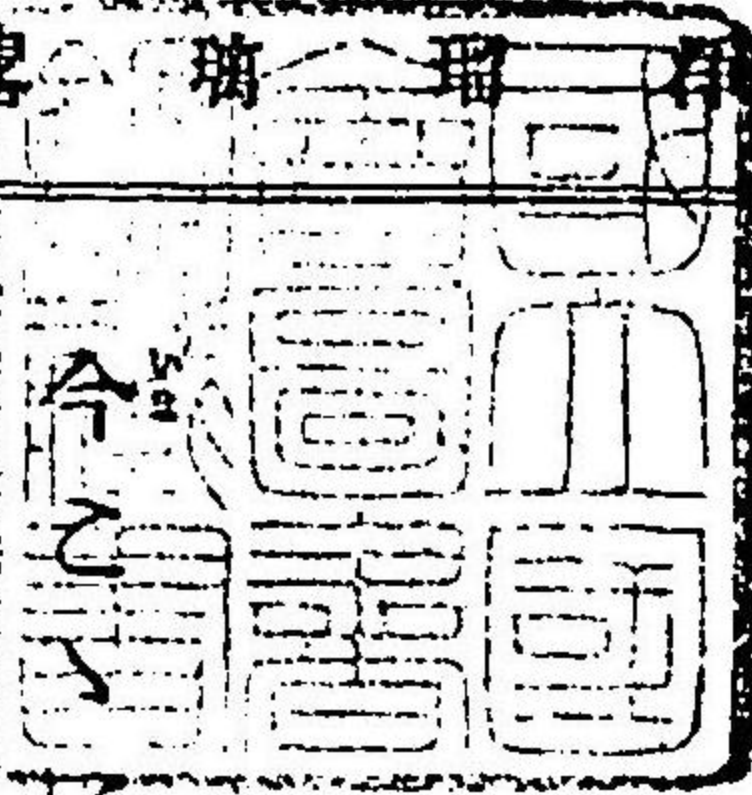
目次終

# 竹本攝津大掾

水谷不倒著

## 其一 淨瑠璃畧系圖

△竹本春太夫の傳統△春太夫代々の畧説△五代目春太夫の逸事△攝津大掾は其六代目



今て、竹本攝津大掾が經歷を叙するに當り、先づ一言すべきは其流派系統なり。そもく大阪は淨瑠璃の本場と稱せらる。而して其開祖は今を去ると二百三十年前寛文の頃に行はれたる井上播摩掾なれど、大阪一流の淨瑠璃を確定したるものは竹本義太夫なり。義太夫の門弟頗る多きが中にも、竹本采女は師と分離して一派を立て、豊竹若太夫と稱し東流の祖となれり。又若竹政太夫は、是も別に一派を立んと企てたれども、師の許可なかりしかば

竹本攝津大掾

一時豊竹に投じ後更に竹本に復し初代の遺言によりて二代目義太夫の名を襲ぎぬ。此他義太夫の高足にして一家をなしたるもの少なからずと雖ども爾來大いに家門の榮えたるは若太夫政太夫等の系統に屬するもの多し。攝津大掾が家系は竹本春太夫の正統に屬し春太夫代々は又實に若太夫政太夫の家系より出たるものなり。よりて先づ義太夫以來春太夫系の畧圖を左に示さん。

○竹本義太夫義太夫節の元祖、貞享二年道領堀に竹本座の櫓を上る、元禄十四年勅許受領ありて竹本筑後掾藤原博教と改む

豊竹若太夫 — 豊竹伊太夫 — 豊竹岡太夫

若竹政太夫二代目義太夫 — 竹本大和太夫初代内匠太夫

○初代 竹本春太夫 — 竹本咲太夫

後竹本播摩少掾

後竹本大和掾

浄瑠璃畧系圖

竹本式太夫

○二代 竹本春太夫

竹本綱太夫

○三代 竹本春太夫初豊竹町太夫、後春太夫更に豊竹を竹本に改稱

竹本津賀太夫

○四代 竹本春太夫

竹本氏太夫

○五代 竹本春太夫初めさの太夫、文字太夫より五代目

○初代 竹本越路太夫

○竹本攝津大掾二代目越路太夫、後改め六代目春太夫、更に攝津大掾と受領

以上春太夫系に就て簡畧なる説明を加ふれば、初代春太夫は竹本大和掾の門弟にして、泉州堺の産なり、饅飩粉商なるを以て粉屋與兵衛と稱したるが、大和掾が未だ内匠大夫の頃の門弟にて、當時の名人となり、春太夫といふ名を好き名にしたるは、全く初代の功なり。延享元年十二月、豊竹座にて『遊君衣紋鑑』序の中を語りしを始めとし、安永七年九月、京都に於て一世一代を興行して、前『先代萩』切に『花系圖都鏡』を勤めたるを、お名残り興行として、爾來隱退し、天明四年三月病没せり。

二代目春太夫は初代春太夫の門人、咲太夫の弟子なりしも、中頃より初代春太夫に従ひ修業せしが、技藝勝れず、寧ろ春太夫の名を汚すの譏りあり。

三代目春太夫は初代豊竹岡太夫の門人なり、此頃竹本豊竹の系統亂脈を極めたるの時、最初は豊竹春太夫と稱したるも、後竹本に改

稱せり。此頃は座本の姓を冒すの風習ありて、豊竹座に出勤すれば、豊竹を稱し、竹本座に移れば、竹本と改むるが如き例往々なり。深き理由のあるにあらず。

四代目春太夫も堺の人にして、通稱柵屋又兵衛といふ、三代目春太夫の門人なり。師の名を継ぎしも、多病の故を以て、堺戎の町西六間筋の自宅に退隠し、あるに、頃は文政八年、當時斯界の勢力家なる竹本播摩大掾が江戸より、咲太夫の門弟八十太夫を連れて歸り、我門弟とし、大阪の芝居へ出勤させるに付ては、何かよき名を名乗らせたしと、四代目春太夫に交渉し、堺にては春太夫の名を用ひざる事にして、暫時八十太夫へ貸與へたりしに、八十太夫は間もなく死去したれば、其名は又舊の主人へ復りぬ。然るに竹本氏太夫の門弟にて、其頃文字太夫といひしは、前途に望みあるものとして、遂に養子となし、其名跡を譲りしが、これを五代目の春太夫なり。



五代目春太夫は初代以來の名人にして、今も古老の屢々話頭に上る人なり。泉州堺鍛冶屋町煙草庵丁鍛冶業長原四郎兵衛の子にして、幼名を彌三郎といへり。十六七の頃までは家にありて父の業を助けしが、生れ付き大兵にて腕力あり、近隣の者を相手に相撲を取るを何よりの樂みとなし、又天性美音なりしかば、潜かに稽古し、太夫にて身を立んと思ひ、頻りと稽古をなし、二十一歳の時修業の爲め大阪に出て、天満靈府の風呂屋へ三助に雇はれて生計を求め、其餘暇を以て竹本氏太夫に就て熱心に淨瑠璃の稽古をなしぬ。此間の辛苦はなかく、後人の想像にも及ばざる程なれど、凡そ二年ばかりの内に藝道著しく進み、たれば藝名をさの太夫と改め、竹田芝居に『竹取物語』の大序を語り、こゝに藝人の班に加里ぬ。天保五年師氏太夫が江戸へ下るに連れられ、師と共に江戸に滞留すると五年の長きに亘り、此間文字太夫と改名したり。美

音を以て江戸にて評判頗る好かりしが、同五年稻荷文樂より、氏太夫に歸阪を促すと頻りなれば、氏太夫先づ歸り、文字太夫は翌年の春歸阪し、八月興行に『岸姫松』『飯原屋敷』の中と『四谷怪談』『頼母住家』の口とを語りぬ。それより師に従ひ同座に出勤し、たるところ、天保十三年宮芝居廢止に接し、堺へ歸り、四代目春太夫の養子となり、同十一月堺新地芝居にて、五代目春太夫改名披露をなし、『姫小松』と『合邦辻』とを語りしが、翌年二月文樂にては、北堀江市の側の芝居を借受け、出勤を勧めたれば、同座にて『忠臣藏』三の切と、おかる身賣の段を勤め、それより若太夫、竹田芝居等諸所を打ち廻りしが、弘化元年の冬再び江戸へ下るとなれり、此度は自分座頭にて、其頃三味線の名人と聞えたる三代目野澤吉兵衛を同伴しぬ。此人江戸に留ると凡そ三年間、各寄席を稼ぎ、たる内、或日出羽庄内藩主酒井左衛門尉の江戸邸へ招かれ、殿の面前にて『忠臣藏』『山科の段』を語り、

右終つて別室にて休息しゐると、殿は突然其室に入り來りしにぞ、春太夫及び吉兵衛はやゝ狼狽の躰にて平伏せしに、殿のいふ予は淨瑠璃は分らざれども、武家に生れたれば武藝は一通り心得をれり。何藝にても達人となれば同じ理合あり、それは外でもなし、今其方の語りし淨瑠璃に、隙もあらばと、窺ひ見たれど、氣合が充満して寸分の隙なきには、實に感心致したりと、激賞されしかば、春太夫吉兵衛兩人は恐れ入つて、身に餘る面目を施しぬ。此事いつしか世間に傳はりて、春太夫の名はいよく高くなりぬ。文樂座が松島へ移轉せし後のとなるが、當時春太夫の宅は博勞町稻荷の南門の傍にありて、吉兵衛方は松屋町の石町に住居し、たれば、毎日文樂へ通ふに、吉兵衛は弟子を連れて、小舟に乗りて往復し、其往返する毎に必ず博勞町の濱へ舟を寄せ、春太夫を同じ舟に招じ、斯くして送迎すると一日も怠らず。人皆吉兵衛の約束堅き

を褒めたるが、春太夫も又性頗る活達にして、若き時具に辛酸を嘗めし人なれば、衆人の氣受けよく、常に人より尊敬せられるたりといふ。吉兵衛素より藝人氣質の義理に堅き人なれど、春太夫に徳の備はれるを察すべし。此春太夫と吉兵衛こそ、今の攝津大掾を拵へ上げたる人なれば、殊にこゝに其經歷の概畧を擧ぐるのみ、大掾との關係は後章中に説明する所あるべし。

其二 天保嘉永の聲曲界

△掉尾の全盛時代 △名人上手の輩出

攝津大掾が生れたる時代の大阪淨瑠璃界の状況はいかに、天保七年即ち彼が生れたる頃の事實は詳にするを得ざるも、彼れが二見伊八に養はれ、頻りと三味線の稽古に餘念なき十四歳の時、即ち嘉永二年の發行にかゝる『三都太夫三味線人形競鑑』といふ相撲番附に擬したる番附を見れば、當時の状況一斑を知るに足るべし。即

竹本攝津大掾

ち此番附に載せられたる幕内太夫の名を掲ぐれば實に左の如きものあり。

大關	大阪竹本綱太夫	大關	大阪竹本染太夫
關脇	竹本長門太夫	關脇	豐竹若太夫
小結	竹本大隅太夫	小結	豐竹巴太夫
前頭	豐竹駒太夫	前頭	豐竹岡太夫
同	京都豐竹三光齋	同	竹本梶太夫
同	大阪豐竹八重太夫	同	豐竹湊太夫
同	同竹本津賀太夫	同	竹本内匠太夫
同	京都竹本むら太夫	同	竹本茂太夫
同	大阪竹本越太夫	同	竹本中太夫
同	竹本咲太夫	同	竹本春太夫

天保嘉永の聲曲界

右は三都とあるも、大阪を中心とせると論を俟たず。又實際昔今を通じて淨瑠璃は大阪に其勢力集り、京都、江戸は唯其制を仰ぐのみ。さはれ右連名の中には老朽者もあるべく、又情實の爲めに分外の地位を保つもあるべけれど、今日より見る時は實に黄金時代に於て、名人上手雲の如く、古者をして徒らに昔しの全盛を追懐せしむるも無理ならず。今其一二に就ていはんか、長門太夫は其音聲頗る多方面に利き、普通名人といはるゝ人にて、或は艶物に巧みとか、或は三段目に長ずとか、單に其一技能を具へたるも多とする所なるに、長門の如きは三段目でござれ、四段目でござれ、チャリても艶でも何でもござれにて、其聲調の悲壯淋漓なると婀娜艶麗な

同	竹本筆太夫	同	竹本錦木太夫
同	竹本頼母太夫	同	豐竹時太夫
同	竹本津島太夫	同	豐竹島太夫

るとに論なく、何れの語り物にも巧妙を極めしは古老の齊しく歎賞して措かざる所なり。斯の如き名人にしてなほ大關の地位に進む能はず、當時人の多き以て知るべきなり。三光齋はもと高野山の僧にして、或は山伏ともいふ、淨瑠璃に妙を得たるより、遂に太夫となりし人、其體格の肥滿にして、大兵さながら力士の如く、先づ酒を二三合飲み、銳氣を養ひ、其便々たる腹より絞り出す音聲は、朗々絶ゆる所を知らず、其見臺に向ふや、端然と姿勢を保ち、扇を斜に構へたる儘、身動きもなさず、行儀作法を頷さるを以て有名なり。きといふ。其聲の好きと押し察すべし。津賀太夫は今の津太夫の師匠にして、後山城掾といふ。之は古今獨歩のチャリ語りと稱せられ、世話語りには、咲太夫、内匠太夫あり。八重太夫、後に麓太夫、津島太夫、後に綱太夫、染太夫、後に越前大掾、梶太夫、後に染太夫、巴太夫、湊太夫、春太夫など、何れも相前後して、名人上手と稱へられた

る人、一々こゝに説明するの要なし。之を今日の太夫に比する時は、寧ろ長大息の禁じ難きあり。攝津大掾が藝人としての生涯は、最早遠きにあらざ、彼れは其餘りに老朽せざる前に於て、隆々たる盛名の未だ衰へざるに於て、赫々たる名譽と光榮とを擔ひ、勇退せんとする意蓋し切なりと聞く。然らば何人が今後の舞臺を脊負つて立つか、僅に望を囑せられをるものは大隅、越路の二人あるのみ。斯道の衰微も亦甚しといふべし。天保嘉永は淨瑠璃に於る掉尾の時代なり。貞享、元祿以降二百餘年來、打續きし竹豊の流れは、こゝに至りて最後の繁榮を極めたるものと謂ふべし。攝津大掾は實に此時に成人し、其名人上手の輩出せるを目撃し、其間に立ちて練習し、技藝を研磨し、天晴一代の名人、斯道の大家と仰がれしなり。

其三 幼名吉太郎

△歌舞伎俳優は門閥△浄瑠璃の太夫は出来星

歌舞伎俳優はさながら世襲の華族の如く昔しより名人上手といはるゝ人は概ね名門より出ざるは稀なり。縁も由緒もなきものが俄に俳優とならんとするも容易に其地歩を占むる能はざる事情ありき。川上音二郎が初めて東京に上り大いに窮したる時市川團十郎の門を敲きて其弟子たらんとを望みしに團十郎は到底其地歩をなすべからざるを諭し彼れに劇場を借りる幹施をなし川上を慰め還したりといふこれ所謂舊派の情實纏綿たるを察するに餘りあり。蓋し歌舞伎俳優に在りては甚しく家柄を重んずるの風習あり。それゆゑ市川の如き尾上の如き市村片岡中村の如き皆此理由より彼等社會に重きをなし重きを致さるゝが故に自ら名優を出し

たる譯なれど素性もなき者の家に産れては縱令技倆は充分あるも常に重き役をなすと能はざれば其藝も自ら卑屈に陥り遂に生涯立物になる能はざる者十中の七八なり。即ち幼少の時より俳優に對する教育の然らしむる所にして名家に生るれば藝道に對し金を惜まず殊に小兒の時分より好き役のみを附するを以て性來の大根も自ら藝に伸び名人上手に研き上ると左まで難事ならざるも家柄なき者は石龜の地團太遂に高尚の藝に有附くを得ず。二枚目なれば二枚目道化なれば道化と是又子々孫々に其家に傳はる役柄を世襲し中には生涯申上ますにて終る者もあり。歌舞伎俳優の出所進退は今日に於る教育制度の如く大學出身にあらざれば高等官たる能はざるなり市川尾上市村片岡中村等の名家に出るにあらざれば遂に大立物として世に立つと能はず。然れども浄瑠璃語りは之と異なり出所進退に於て何等の制肘せ

らるゝ家柄なく何人と雖も天性の美音を備へ淨瑠璃を語るの才  
 能を有するに於ては、布衣より出て斯界の王者となることも強ち  
 難事にはあらず。此點に於ては俳優の貴族的なるとは全く異り  
 て、太夫は實に自由の下に生活するものなり。太夫に在りては家  
 柄も血統も遺傳も云たものにあらず、唯聲調の天才にあり。其父  
 がいかに天下に名を得たる淨瑠璃語りなればとて、其子に聲調の  
 天賦なければ名人たるを得ざると同時に、桶屋の息子にても、左官  
 の丁稚にても、何人にも音聲よく節廻しに巧みにして、鍛錬工夫  
 の功を積みめば、一流の人となることは頗る造作もなきことなり。  
 即ち歌舞伎俳優を貴族的とすれば、太夫は宛然一代分限の出來星  
 と謂ふべし。攝津大掾の出身も亦此格を外れざるなり。彼れは  
 淨瑠璃の家柄としては何等誇るべきものもなく、さればとて遺傳  
 に繼承したる所もなし。唯天性に美音を有したると、周囲の關係

より藝人に近かしためたるが縁となり、刻苦勉勵の修養によりて、  
 今日天下第一人の名人と仰がるゝに至りしものなり。彼れの生  
 れは何でもなき唯一個の町人に過ぎざりき。  
 攝津大掾は今を去ると六十八年前、天保七年丙申の三月十五日に、  
 大阪順慶町三丁目塗物問屋伊勢屋に生れたり。父は森七三郎、母  
 は久といひ、彼れの幼名を吉太郎と呼べり。故ありて母の久は離  
 別となり、吉太郎は母と共に實家に戻り、父七三郎は後妻を娶り、其  
 甥に當る者を養つて子となしたれば、吉太郎は父の家を繼がずし  
 て他に養はるゝ身となりぬ。彼れが五歳の時、吉太郎は其母の實  
 家より、釣鐘町上の町、現今東區なる大工の棟梁大和屋事二見伊八  
 なる者に貰はれて、其の養子とはなれり。これ實に攝津大掾が淨  
 瑠璃界に足を踏入るの第一歩なりき。若し幸福にして平和に母  
 と共に、彼れが伊勢屋の世繼となりしなれば、受合つて眞面目な實

直な上品な一個の市人は出来たるならん。されど今日聲調を以て天下を動かすほどのえらものは到底望むべからず。左すれば母と共に父の家をさまよひ出しは彼れの爲めに幸福なり。よし彼れの爲めには不幸なりしやも知れず、而も聲曲界は彼れを得て大いに最後の舞臺を飾りしなり。

其四 養父伊八の素人淨瑠璃

△大阪に於る素人淨瑠璃一班△三味線の稽古

吉太郎二見伊八に養はれて名を龜次郎と改む。彼れの養母はこうといへり。龜次郎は伊八に養はれ、普通一般の人のなす如く手習師匠に就て習字の稽古をなしたる外には職業として大工の業を習ひしも身體虚弱にして物にならず。刀職にならんと柄巻の稽古をしたるも是又成業に至らず中途にして廢したり。之を見ても彼れは常人としては殆ど無價値の人物なり。然れども好き

こそ物の上手なれの譬へに洩れず淨瑠璃に關しては天賦の技能を備へたり。

先づ彼れは如何なる縁によりて聲曲の道に入りしか。之を導きしものは養父伊八の素人淨瑠璃なり。大阪の事情に通ずる者は、今日に於ても大阪にいかにも素人淨瑠璃の流行するかを知らん。蓋し淨瑠璃なるもの、發達沿革を見るに、元來太夫なるものは歌舞伎俳優の如く専門的に技藝を仕込まるゝものにあらざるが如し。勿論時としては斯界の名門より出る純粹の太夫なきにあらず。今の津太夫の如き親の代より太夫なるもあれど寧ろ稀なる例なるべし。素人淨瑠璃が効を積み上手となり座數藝より本藝に移るもの決して少なからず。元祖竹本義太夫以來名人上手といはるゝ太夫にて此種の出身随分と多かるべし。蓋し大阪に流行する素人淨瑠璃なるものは其籍を藝人に置かさるのみ、或意味

にては太夫の養成所なり。身分あり又別に考へを有する人は、いかに素人藝が上達したればとて、其上達の故を以て直ちに藝人となるが如きは無き事なれども、普通の人が浄瑠璃を稽古するは、豈啻に坐敷藝を以て最上の目的とするものならんや。座敷藝を以て最上の目的とせざるべからざるは已を得ざるのみ。其身分を重んずるか、其業務に鑑みるか、さては其藝の到底見込みなきに因らずんばあらず。技倆にして自ら恃むところあり、又自家の名譽と地位とに、何等の影響を及ぼさずとすれば、定芝居に出勤して一度は喝采といはれたきが人情なるべし。されど定芝居は僅に、もしくは二に過ぎず、到底是等の多数の野心家を容るゝに餘地なし。これ一方にますゝ素人團隊座敷藝の流行する所以なるべし。大阪の素人浄瑠璃の盛なる實に驚くべきものあり。蓋し大阪は浄瑠璃の本場なり。元祖義太夫が一流語り出せしより、今日

に至るまで二百有餘年、名人上手輩出して、大阪人の趣味を涵養し、大阪人をして遂に性來の浄瑠璃好となしぬ。されば苟も大阪人を以て任ずるものは、聲の有ると無きとに頓着なく、浄瑠璃の一段ぐらゐ語らざるを以て大いなる耻辱となす。所謂旦那衆と稱せらるゝ紳士をはじめ、お店もの、日雇、車夫、仲仕に至るまで、或は自宅に師匠を聘し、或は夫れゝ稽古屋に入込みて、浄瑠璃の稽古に餘念なきもの、恐らく萬を以て數ふべし。今日は決して浄瑠璃全盛の時期とはいふべからざるも、素人藝はなほ盛んに流行して、至る所にデンク、太の音、オウク、の唸り聲を聞ざるなし。一例を擧ぐれば、著者が靴の假寓に並びたる凡そ半町ばかりの間には、毎夜浄瑠璃の稽古をなしをる素人四ヶ所あり。こゝより僅か一丁を隔てたる著者が前寓の隣家の主人も、やはり浄瑠璃好なりしが、此人は横好の方にて、餘り上手ならざると、極く控目な人なりしより、



著者が其家に住へる間は、遂に一度も語らず著者が僅にこゝに四ヶ月ばかり住みし後、今の所に轉居したるが、轉居したる翌日の夜、其家にては急に浄瑠璃會を催したりと聞き、何故我が住まへりし間は唸らざりしかを、内々探り見しに、其家にては著者が時々「大阪毎日」の紙上に、文樂の批評をなすことを知り、若し自分達のを評してもされては堪らぬといふところより、我が居る間は友達の所のみにて會を催し、遂に四ヶ月の長き稽古もせず、辛抱を續けたりといふを、かしくもあり又氣の毒にも思ひたるが、そもく素人藝の批評に上ると思ひたるも、随分押の強き話しなれど、こゝが所謂天狗にて、斯の如きは市内至る所にあり。「浄瑠璃雜誌」の報ずる所によれば、大阪市内に於る浄瑠璃の稽古屋なるものは、東區に二十八軒、南區に二十一軒、北區に二十軒、西區に十八軒あり。是等は名ある藝人にして、鶴澤野澤、豊澤を名乗る

三味線彈にあらざれば、竹本豊竹を名乗る太夫なり。此外器用て受次をするもの、又は藝人ならぬモガリの稽古屋まで數ふる時は、なかくに多きとなるべし。去る二十二年に刊行せられたる素人浄瑠璃の名寄を見るに、當時大阪市中に既に名をなしたる天狗連、殆ど一千名あり。又三十六年の一月初刊の『小天地』第三卷の一號に、鬼谷蓬吟氏といふが、關西の浄瑠璃界なる題下に、大阪現今に於る浄瑠璃の状況を述べ次に、素人浄瑠璃に及び、其盛なる證として、毎夜大阪市内には平均三回の浄瑠璃會があると、及び其會合の勢力あるもの、名を列挙したり。即ち左の如し。

因若松連、瓢會、杉の木會、小松會、和合會、南連、船場連、東連、北陽連、久寶連、見松連、程々連、都鳥連、若竹連、旭連、水魚連、眞正會、聲友會、壽連、喜悅連、美那茂登連。

而して右一連中の人員は平均二十名を下らずといへり。素より詳細の調査を経たるものにあらざるべく、又時によりて盛衰消長

ありといへども以上の事實に徴してもいかに大阪に素人淨瑠璃の流行するかを知るに足らん。攝津大掾か養父たりし二見伊八は今日とは稍時代を異にすれど、流行に於ては今日よりも寧ろ一層盛なりと思はるゝ舊幕の末年に於て此素人淨瑠璃の一人なりき。表徳をい文といへり。大工の棟梁はいふまでもなく彼れが本職なれども其道樂として彼れは大阪のデン通即ち天狗を以て自ら居るものなり。されば彼れに養はれたる龜次郎は見やう見真似に幼き時より淨瑠璃の文句を暗んじ今日の童男童女が唱歌を口吟む如く最も巧者に語るを見て養父は頗る得意となり、いろくの職業を教ゆる傍ら龜次郎に三味線の稽古をなさしめたり。これ龜次郎が十一歳の頃に於て養父は全く慰みに稽古させたるものなれど遂には藝に一身を打込み養父の諫めも聞かぬやうになりぬ。

其五 藝人の決心を固む

初めて江戸へ下る、△日光街道の窮迫

龜次郎が三味線の初稽古をなしたるは其頃竹澤龍造といふ三味線弾の弟子に竹澤龍之助なるものありて素人の稽古屋をなしたりしかば、龜次郎は此龍之助に就きて學びしが好きな道とて覺もよく熱心に稽古をなしければ他の者とは違ひ上達頗る早く、聴てやゝ弾けるやうになりて後、其頃の名人として聞えたる三代目鶴澤清七の門に入りて益々藝道の修業を勵みぬ。原來太夫と三味線とは僅に皮一重の違ひなり。太夫にて三味線弾く術を知らず三味線弾にて語る法を辨へぬが如きは素よりあるべき謂れもなけれど其長所短所が兩技の分るゝ所にして或は三味線弾ともなり或は太夫ともなり中には兩技兼帯の彈語りもありて、各々其得意の方向に傾くは自然の道理なるが、龜次郎は最初三味線弾を

以て出立したるものなれど、三味線の稽古と共に益々浄瑠璃の文句を覚え、彈語りをするうちには、天性の美音は發揚せられ、いつしか三味線よりも浄瑠璃の方が、一枚も二枚も上なるかと思はるゝ程にて、他人からも斯いはるれば、自分にも心付き、寧ろ其長じたる所を専修し、行くくは浄瑠璃語りとなり、身を立やうかと思ふともあり。

日々修業の効を積むに従つて、益々浄瑠璃は巧くなり、他人より賞賛を受くると屢々なれば、年若き龜次郎は嬉しく頻りと調子に乗り、殆ど寢食を忘るゝまで熱心して稽古をなせしより、本職の大工は遂に疎となり、鑿や鉋は一向に手にも觸かず。大工が嫌なれば、刀職でもすべしとて、柄巻の稽古にやりしも染々習はず、平常は柔順にて養父母の命は決して背かぬ質なりしも、此一事のみは何といふも命令を聞ずして、龜次郎は浄瑠璃をのみ修業しをるにぞ、養

父伊八も少しく持踏み、斯と知らば最初より三味線の稽古などさせず、眞面目に本職のみ營せたりしに、今となりては後悔も既に遅し、殊に自分が吩咐て習はせたるとなれば、今更叱る譯にも行かず、大いに當惑せしが、しかし當人の身の爲め家の爲なればと、屢々意見を加へ、職業と道樂のけじめを云聞せ、本職を勤めたる上にて慰みならば程よくすべしと諭せども、龜次郎は馬耳東風、一向聽入べうも見えざりき。

龜次郎は養父の意見には耳を傾けずして、頻りと浄瑠璃に憂身を婁しをりしが、遂に大いに決する所あり、一日養父伊八に向ひ、到底家業を營むべき見込みなければ、寧ろ其長じたる浄瑠璃を以て爾今、藝人の仲間に入り、身を立つべきに依り、何卒許してくれと思ひ入て頼みたり。伊八も是には頗る困り、眉を寄せけれども、日頃龜次郎が素振りといひ、熱心面に現れて之を拒みたればとて、彼れが思

ひ止るべき様子もなく、強て壓制すれば或は家を脱するともあるべしと深くも憂慮し、寧ろ彼れが意に任すより外なしと思ひたれど、道に許しかねてや躊躇しぬ。そは自分とて素人淨瑠璃を語るもの、普通の人の之に對するとは自ら異なれども、代々堅氣の家業を營み來りしものが、一朝にして養ひ子を藝人の群に投ずるは道に世間の手前、實家へ對し相濟ずと思へばこそ、頼には決しかねたるなれ。暫時は有無の返事も與へざりしかど、龜次郎の志は牢固として、抜く可らず、されば此上は是非に及ばずとて、安政三年龜次郎が二十歳の時、伊八は遂に其望を容れて、龜次郎の意に任すことせり。されど此時伊八は龜次郎を傍近く招き、いよく今日より藝人となるを許せども、藝人にて身を立る以上は、假りにも世間有觸れたる藝人根性を出し、唯遊惰酒色に耽りて日を送るが如きとあらば、此養父の面に泥を塗るもの、親子の縁もそれ限りなり。

この所を能く辨へ、今日より以後、技藝に精勵して、天晴一代の名人上手といはるゝやうになるべしと、懇々將來の事ども諭しければ、龜次郎は養父が厚き情に感泣し、養父の詞には決して背くまじきを心に誓ひ、是より身を藝人社界に投じたるが是と同時に、龜次郎は師匠を替へて、爾後三代目野澤吉兵衛の門人となりぬ。此頃の事なりき、龜次郎は當時大阪に錚々の聞えありし素人淨瑠璃十三道、修町、塩屋、藤兵衛の息子(の三味線に連れられて江戸へ下りぬ。江戸には十三の友人にて堂島の尼文といふ、これも素人淨瑠璃仲間あり、三人連にて日光遊覽に出掛け、其歸途慰みやら旅費を作る爲めやらに、道々興行をする筈にて、日光街道なる粕壁にて十日ばかり打ちたるが、一行の尼文は急に大阪へ歸らねばならぬ用事出來、十三と龜次郎に別るゝとになりしも、大阪まで行くべき旅費なきより、十三が持合せし金を尼文に貸與へ、自分等二人は此

一分銀一つにて江戸までは大丈夫なるべしと、一分銀一つを残して、尼文を送り出し、二人は後より緩々歸途に就き、或所にて晝食をなし、勘定となりて右の一分を出したるに、不渡りにて二人の當惑一方ならず、幸ひ懐中には二十五文の錢ありしを以て、是にて漸く晝食の勘定は爲したれど、さて江戸までは猶七里の所を一文なしで歸る心細さ、千住へ來て漸く兩替屋に就きて替へて貰ひ、こゝより船に乗りて江戸へ着し、程なく大阪に歸り、其後は一心不亂吉兵衛に就て、三味線の稽古をなしぬ。

三十

### 其六 三代目野澤吉兵衛

△初めて南部太夫と名乗る△最初の旅稼ぎ△江戸の大修業△越路太夫と改名△吉兵衛の死去と歸阪。

野澤吉兵衛は其はじめ鶴澤市治郎といひ、文三の門人なりき。父、

は初代竹本越路太夫にして、此越路太夫もはじめは野澤勝鳳といへる三味線弾なりしが、後太夫に業を替たるも、藝人としては第二流以上に登らず、其子の吉兵衛は殊に三味線の名手として知られたり。天保五年より諸所の芝居に出勤し、同十一年八月稻荷文樂にて父の初名勝鳳を襲ぎ、野澤姓を冒すに至りぬ。其時の役は「岸姫松」序切なりしが、同十二年閏正月十三日より前が「妹背山」にて父の越路太夫は附物に「御所櫻」三の切を勤めし時之を弾き、同四月「玉藻前」二の切、同七月「秋七草」二の切を勤め、其後故ありて父子ともに文樂を退座したり。同十三年五月彼の水野越前守の改革にて宮芝居廢止となり、文樂其他神社境内にある小劇場は一時退轉したれば、同十五年道頓堀若太夫座に出勤し、「信仰記」を勤め、此時三代目野澤吉兵衛と改名し、切に「國姓爺」三段目を、竹本越前大掾が語りしを弾き、大いに名を揚げたるに、兩人とも又々之も退座したり。龜

三十一

次郎が師匠と頼みし頃は、竹本春太夫を弾きぬたりしが、思ふ所ありて其三味線を高弟なる野澤吉彌後四代目吉兵衛となるに譲り、自分は別に一座を組織して、地方興行をなさんと思ひ立ちぬ。抑も此吉兵衛が組織になれる一座といふは、素淨瑠璃にして、太夫三味線とも皆自家の配下のものにして、世間には未だ名を成さず、而も將來爲すあるの才を多く集め、修養かたゝ、地方興行をなすものにして、吉兵衛はいふまでもなく之に座頭たり。而して此興行の眼目とする所は、掛合の三味線に人を呼ぶにあり。語り物は必ずしも掛合とは定まらざるも、少くとも彼れが冷えたる撥音に、聴衆の歎呼を買ふにありて、例へば、阿古屋の琴責の如き、堀川の如き、千兩職の如き出し物なり。此一日の山の前には、銘々又一段づゝの語り物のあるとは無論なれど、此眼目の語り場には、殊に美音の太夫を要するとなるが、斯る一種の目的ある興行に出勤する太夫

を、此社會にては道具といふ、其使はるゝを意味するものなり。斯界の傑物たる三代目吉兵衛は、自家獨特の妙技を當込み、地方興行の一座を組織したるは、必竟人形淨瑠璃の單調なる藝人生涯に飽き、芝居の羈絆を脱し、自由に我藝を賣らんとしたるに外ならず。吉兵衛は我命に隨ふ有爲の青年藝人を網羅せる内にも、龜次郎が天性の美音と其語り口の拙からざるに早くも眼を注ぎ、自家の妙技を演ずるには、彼れを以て此上なき道具と信じたれば、遂に龜次郎を一行中に加ふるとなしぬ。こゝに至りて、龜次郎にては通りわるしと、吉兵衛自ら紹介の勞を取りて、五代目竹本春太夫の弟子となし、春太夫より竹本南部太夫と附けられぬ。これ安政五年のどにして、龜次郎が二十二歳の時なりき。實に攝津大掾が藝人として其名を掲げたる初めなり。龜次郎は師匠春太夫より南部の名を貰ひ、初めて籍を藝人に置き、

第二の師匠にして、其實第一の師匠たる野澤吉兵衛に連れられ、近畿より中國四國と打廻ると凡そ二年、此間始終吉兵衛の懇篤なる薫陶を受けて見臺の功を積みしかば、是迄の慰み半分の藝とは違ひ、長足の進歩をなし、最早何處へ押出しても耻かしからぬ迄に上達したり。萬延元年南部が二十五歳の時、吉兵衛は更に彼れを引連れて江戸興行を思ひ立ちぬ。

此時の一行は吉兵衛南部をはじめ、竹本其太夫、野澤勝鳳、吉兵衛の弟子等數名なりしが、吉兵衛の考へにては、南部を眞打として自ら其三味線を弾くにありしかば、南部は餘りに其大役に過ぐるを恐れ、吉兵衛に向ひ、自分の如き未熟の藝を以て、師の妙手を煩すは名譽は名譽なれども、到底其役に堪えず、其れも田舎ならば兎も角、花のお江戸まで出で、斯の如き提灯に梵鐘の不釣合は、いかにも心苦しき限りなり。今度は平に許されたしと固く辭みたれども、吉兵

衛はなかく聞入べくも見えず、成程自分と立並んで語るは或は少しまだ荷が重いかもしらぬが、志かし此大役を見事遣つて除るやうな勇氣がなくては頼母しからず、釋尊とて難行苦行の功を積み玉ひしこそ、初めて佛とも崇めらるれ、天下の名人上手とならんとすれば、是くらゐの事に恐れてはならず、少しは辛く思ふとても、曲げて我意に従ひ、一奮發して修業の功を積むべし、然る後再び大阪に歸る時には更に驚くべき進歩あらんと、何時に變らぬ吉兵衛が誠實なる詞に、南部も難有さ骨身に徹し、此上辭するは却て師に對して濟まぬと決心を固め、愈々吉兵衛に従ふとはなれり。

斯くて一行は同年の八月に大阪を出發したるが、未だ汽車汽船など交通機關の備はらざる世なれば、東海道を膝栗毛にて、九月に漸く江戸へ着きぬ。江戸は八丁堀植木店に家を借り、師吉兵衛と同じ居し、日々萱場町、八丁堀其他の寄席へ出勤せしが、此時より彼れは

竹本越路太夫と改名せり。そは前にもいへるが如く、越路太夫の名は吉兵衛が實父の藝名にて、是より先き弘化の末江戸に出て、諸方の寄席を打ち廻りをりし内、嘉永元年の八月遂に江戸にて病没せしかば、遺骸は深川雲光院に葬り、同所に今も其墓あり。吉兵衛が今回江戸に下りしも、一つは其實父なる初代越路太夫の十三回忌の追善法會を營まんとするにありて、吉兵衛は江戸へ到着するや、直ちに年回を雲光院に營み、日頃我子の如く慈しみて、藝を仕込みたる南部をして其名を襲がしめ、二代目越路太夫と改名したるは、聊か亡父が幽魂を慰めたると同時に、新下りの彼れをして、なほ江戸には多少のお馴染ある名を襲しめて、其人氣を呼ばんとしたるなり。勿論既に春太夫の弟子となりをるとなれば、專斷にて改名するとも出来ざれば、吉兵衛は江戸より手紙を以て、其許可を春太夫に得たり。越路が其名を爾來四十餘年の長き間持したるは、

師吉兵衛の海山の恩を忘れざる爲めにして、越路太夫の名は全國に鳴響き、今日其名は前の文字太夫に譲られ、自らは一旦春太夫の名を襲ぎ、更に攝津大掾と呼ぶに至りしに拘らず、世はなほ依然として彼れを春太夫とも大掾とも呼ばずして、越路と呼べり。彼れに取りて越路の名は、實に因縁深く又頗る名譽ある名といふべきなり。越路は植木店の寄席へ、初めて出勤して、其美音を江戸人の清聴に達しぬ。素より修行時代のと、未熟な點は多々ありしに、相違なきも、吉兵衛の三味線にて大阪新下り二代目越路太夫の評判は、噴々たり。されど一方には、又越路が此時ほど辛酸を嘗めたるをなく、彼れは我未熟の藝に望を絶ち、屢々逃出さんと思ひしとすらあり。蓋し文樂彦六芝居の如きは、一興行の語り物は、最初に一定し、中途變更するが如きとなき例なれども、江戸の寄席は大阪の如く、一興



行中一冊の淨瑠璃を大序より大詰まで通すなどは決して無く例へば十五日の興行とすれば其十五日間毎夜語り物を改め一つ興行に同じ淨瑠璃を語るが如きは客人のお好みならざる限り絶えなく斯の如きとをすれば此上もなき太夫の耻辱なり。されば江戸の寄席に出勤するには段数を多く知らざるを得ず更に難題ともいふべきは此前春太夫と吉兵衛とが江戸へ來りし時は八十八文にて今度も吉兵衛の三味線にて同じ八十八文にては餘りに客に對して濟まずとて吉兵衛は越路に二段づゝを語らせ前春太夫の時に對せんといひ出せり。然るに越路は藝人としての日なほ淺く江戸の此經驗は初めてなれば是迄に習得しゐたる數段の淨瑠璃は忽ち種切れとなりて翌夜語るべき淨瑠璃なければ家に歸るや吉兵衛に就て毎夜練習すれども時としては容易く習ひ得ざるとあり。吉兵衛も我子の如く越路を愛すると雖も其は姑息

の愛にあらず眞に彼れを名人に仕立んと熱心より出る愛なれば稽古に於ては非常に嚴格なるものありて越路自ら得たりとするも吉兵衛が腑に落ちぬ間は何時まで経ても可といはず一段の淨瑠璃を習得するに夜を更すと毎夜なれば其辛きと言語に絶し越路が弱り果つる顔を見るや吉兵衛は辭色を正し左程大儀と思はゞ是非に及ばず止むべし。併し明晩の高座にて今宵稽古し能はざりしとを客に向つて謝すべしといふにぞ是は猶更辛きとなれば心を勵し徹夜して一段の淨瑠璃を習得したるとは屢々なりきといふ。又寒聲を使はんと護持院ヶ原に夜一人至り大聲を發して聲調を整へると辻番の者は狂人もやと近寄り幾度も咎められしとあり。此寒聲を使ふには毎夜錢四十八文を懐中して出て咽喉渴すれば風鈴蕎麥を呼び錢十二文にて湯を求め之を潤し又大聲を發し渴すれば更に湯を求む斯くすると概ね毎夜三回に

及ぶを例とせり。されば後には越路此蕎麥屋と心易くなり、蕎麥屋は越路を毎夜の常得意となせりといふ。斯く越路は江戸に於て辛酸を嘗めし効ありて、一年ばかりが間には其藝更に著しく上達し、後に彼れが大坂に歸り、文樂に入るに當りて、此非常なる修業は彼れが出世に一大便宜を與へたり。越路後一家を成し、此事を語る毎に門弟等の舌を巻いて彼れの艱苦を歎賞するや曰く、されど之を我師春太夫の修業時代に比すれば、其辛酸素より同日の談にあらずとて、春太夫が淨瑠璃の修業に大阪に來り、風呂屋の三助となりて、其餘暇を以て修業の功を積み、一代の巨匠となりしとを語り、師の忍耐力は自分よりも更に幾層強かりしか知らずとて歎賛せりといふ。いかに昔しの藝人の修業の劇しかりしかを知るべし。攝津大掾が今六十八歳にて日々床に登り、少しも疲勞の體の見えざる、吉田玉造が七十四歳の高齢

を保ちながら、朝八時より日々勾欄に出て、一座を指揮して毫も怠色なき、必竟若き時の鍛練の功に依らずんばあらず。歌舞伎俳優にても、團菊を失ひたる後に、彼等に繼ぐべき名優の現はれざる如く、聲曲界にても是等諸名人の世を去るの時は、最早藝術滅亡の時なり。蓋し明治の人間は、此嚴格といふよりも寧ろ峻酷なる稽古に耐ふべきもの一人もなければなり。斯の如く越路は一方ならぬ吉兵衛の恩を擔ひて江戸に在りしが、此師とも父とも頼むべき吉兵衛は、江戸へ來りしより三年目なる文久二年の七月に、假初の病より遂に歸らぬ人の數に入りぬ。越路は闇夜に燈火を失ひしが如く、愁傷落膽一時は爲すべき所を知らざりしも、斯てあるべきにあらざれば、心を勵まし同門の者等と計らひ、野邊の送りを濟し、其遺骸は先師吉兵衛には實父初代竹本越路太夫の墳墓の傍に葬りたり。今も深川の雲光院には、初代越

路と三代目吉兵衛が墓の相並び立てるを見る。越路はこゝに杖とも柱とも頼みたる師匠吉兵衛を失ひたれば、其後は一行中なる野澤勝鳳の三味線にて暫時江戸に止りぬ。是より先き吉兵衛が存生中越路は住太夫と改名し、吉兵衛が歿したる時は現に住太夫を名乗りたり。これも初代越路に縁故ある名にて、初代越路は江戸へ來り、住太夫の名を襲んとするの志あり、聽て改名せしに、當時故ありて此住太夫の名は新場の泉屋といふが預りをりて、越路が改名すると聞き故障を持込しに依り、越路は改名し得ず、遺憾の事に思ひをるうち、嘉永元年に病歿したれば、いはば先師の執心の懸りし名なり。吉兵衛が萬延元年に江戸へ來り、初代越路の十三回忌を營みし時には、住太夫の名を預りをる泉屋も其子に代が變り、且先きに泉屋より故障を入れたる理由は住太夫の如き名に對し、初代越路は老人にて餘り優れたる藝にもあら

ざればとて、寧ろ初代越路に與ふるを惜みたるにあり。然るに二代目越路は藝も勝れ、年も若し、近來の人氣ものにて、前途多望の太夫なれば、彼れなれば住太夫の名を此方から遣りたしと、泉屋よりの申出なりしかば、吉兵衛は大いに悦び、亡父が念に懸けし名なれば、之を今の越路に襲がしむるは追善の爲めなりといふ意にて、遂に越路は一時住太夫と改名したるなり。然れども其翌年(文久三年)大阪にて田喜太夫が住太夫と改名し、こゝに東西住太夫二人を生じたれば、越路は江戸に在る間住太夫を名乗りしも、同年六月大阪に歸ると同時に、元の越路太夫に復したれば、住太夫の名を襲きしは僅に一年の間なりき。

其七 春太夫の訓誠

△越路の小不平 △越路大阪を去らんとす

越路は素より忍耐力強く、且つ勉強の人なりしとはいへ、是迄少し

の怠慢もなく、一心不乱に藝道を勵みしは、師匠吉兵衛の誘導宜しきに依ればなり。然るに其師匠が一朝にして黄泉の客となり、彼れを棄去りしは、宛然大樹の影に憩へる者が、俄に其寄る所を失ひて迷へるに似たり。日々諸所の寄席を打ち廻るもの、吉兵衛亡なりては、吐る人もなき代りに、又褒めて來れる人もなく、一向に張合抜けがして面白からざれば、文久三年の六月に、其太夫勝鳳等と共に一先づ大阪へ歸るととなりぬ。先きに越路が大阪を出しより、こゝに四年振にして、彼れは此時二十八歳なり。歸りて見れば、師の春太夫に依るより外なし。されど春太夫は當時文樂座と分離し、たりしかば、同年の八月、京都寺町和泉式部境内の芝居に出勤したるが、一座は竹田操人形といふにて、名代は竹島七五三助、笠谷新太夫、座頭は竹本山城掾なり。狂言は「五天竺」の大序より四段目までと、「岸姫松」に「天網島」、「八百屋献立」に「煙山姥」の各一段もの

なりしが、此時春太夫は「岸姫」の飯原屋敷を語り、越路は番附には江戸下りと載せて、ドンジリに「煙山姥」の「御殿の段」を語りぬ。江戸にては、吉兵衛の三味線にて、人氣を一身に集めたる眞打も、大阪の一座に加つて見れば、僅に追出とは情なき次第なり。されども今迄の越路はいはゞ、緞帳の座頭なれど、此一座は淨瑠璃の大歌舞伎なれば、其地位に高下のあるは素より已を得ざるとなり。其九月には、大阪堀江の芝居へ、同じ一座にて出勤したりしが、出物に「忠臣蔵」と「天網島」、「奴請状」とにて、春太夫は「山科」を語り、越路は「旅路の嫁入」の掛合にシテ、勤め豊竹生駒太夫の「紙治内」に其口を語りしも、絶妙の三味線はなし、語り物はわるし、聲が美しいぐらゐにては、一向に反應を興へざるより、甚だ面白からず、再び江戸に下り、牛後に浸垂れ生涯を終らんよりは、寧ろ鶏口にならんと不平を洩し、竊に逃仕度をなしむたり。此時の越路の心情は頗る快々た

るものなり、自分を實子の如く愛してくれし吉兵衛に離れ、世間一  
 通りの師弟の間に交つてやつて見ると、吉兵衛とは違ひ、自分に對  
 する處置が何れも冷いやりに思はれたり。殊に自分は今新たに  
 同一座に加りしものとして、氣の僻みか、兎角自分一人が繼子扱ひ  
 さるゝの思ひあり。越路は大いに失望し、聊か自棄氣味にてゐる  
 とを、春太夫は早くも洩聞き、若き人の斯く思ふはさるとながら、今  
 こゝで短氣を起し、江戸へ行くといふは、成程潔き行爲かは知らね  
 ど、決して越路が將來の爲にあらずと、一日越路を傍近く招きて云  
 ふに、何人にも少しく藝の上達する時は、兎角慢心が勝ち、なにこ  
 んな詰らぬ役と直ぐ不平をいふは珍らしからざるとなれど、茲が  
 即ち辛抱のしどころにて、此辛い術ない面白からざる瀬戸を越ゆ  
 るにあらずれば、眞人間とはなれず。藝道に於て慢心ほど恐るべ  
 きものあらず、素より難事には相違なけれど、眞に藝道を研んとす

る熱心あれば、常に自分の藝は未熟なものとして生涯稽古を怠た  
 るべからず。縦令自分より目下の人にて、も節詞の中には各々長  
 所あり、一句一節には随分名人上手を凌ぐべきほどの妙所もある  
 ものなれば、斯様なる所にては他の長を採り、床に上りても役不足  
 なる時は、何人にも遂に怠惰がちになり、見臺を疎畧にするは人  
 情なれども、苟くも藝を以て身を立んとするものは、斯様のとぐら  
 ゐにて、不平不満足を唱へてはならず、如何なる場合にも満身の力  
 を込め、決して席次の如きは念頭に懸けずして、唯々藝道の修業第  
 一と心掛けねばならず。偶然江戸より來り、一向に香しき待遇も  
 受けぬより、好い心持はせず、或は再び江戸へ行きたいなどの考へ  
 も起るや、知れず、其れもさらく無理とは思はされど、爰が人間の  
 大切な場合、藝人でいへば名人上手となるか、平々凡々で一生を終  
 るかの分解道なれば、斯る考への浮びしなれば、能く思案を仕

直して暫く我慢して大阪に止るべし。淨瑠璃ばかりは江戸にては修業は出来ず大阪に限るとなればと懇々の説諭に、越路は師の厚き情と其詞の一一道理に適ふを知り、今更自分がまた未熟なる藝道を有ちながら、非望の野心を抱き、師にまで心配かけしかと後悔し、感涙に咽びて師の好意を深くも謝し、江戸へ赴くなどのとは全く断念し、是より大阪に留まり、熱心に藝道を研かんの志を立てぬ。若し此時越路にして大阪を去らんか、素より其の美音の天分を發揮するには妨げずと雖ども、其前途は知るべきものゝみ、今日の光榮ある彼れが地位は實に此春太夫が一言の訓誡與つて力あり。

今にても攝津大掾が自分には大恩ある師匠二人あり、其一人は親しく藝道を仕込んで貰ひし三代目野澤吉兵衛にて、他の一人は竹本春太夫なり。此二人の師匠の教訓と指導とによりて、今日あれ

ばとて、二人の肖像を畫かせ、一室に安置して、毎朝文樂座に出勤する前には、必ず二師を拜して出掛けるといふ。越路を産みしものは父母、其美音を授けたるは造物主、彼れを聲曲界の大家に仕立上げたるは吉兵衛、春太夫二人なるとはいふまでもなし。

其八 出世の端緒

△文樂座の出勤 △先輩の代り役 △好評噴々

京都と堀江の二興行にて、地位の低きより稍不平を起し、寧ろ東京へ再び下らんかと思ひたる越路も、師匠春太夫が情ある詞に全く思ひ止りて、其後は大阪に腰を下し、藝道修業の躋を固めしが、文久三年の十月より翌元治元年の九月まで、凡そ一ケ年間は春太夫一座に加りて、長崎より九州地方諸所を打廻り、大阪に歸りたり。大阪に歸りて、其十月には北新地の芝居へ、同十一月は堺南の芝居へ出勤したり。北新地にては『妹香山』『花上野譽碑』『迷途の飛

脚等に於て、越路は『妹背山』の道行にシテと御殿の口とを語りしが、竹に雀は其時師の春太夫語りぬ。堺にては『先代萩』『布引瀧』『戀娘昔八丈』『兜軍記』等に於て、此時は琴責の掛合に、山城掾の岩永越路の阿古屋春太夫の重忠といふ役割にて、三味線は四代目の吉兵衛三曲は野澤八重八相勤めたりき。然るに元治も僅に一年にして、翌年は慶應と改元せらる。其正月には越路等中以下の太夫にて座を組み、天満天神新門前の小家にて素淨瑠璃を興行せり。同年三月には博勞町稻荷難波神社境内にある植村文樂軒持の東の小家に、ヤハリ師に随ひて出勤せり。前に記したる通り、是迄春太夫と文樂とは分離しゐたりしを以て、京都堀江九州等諸所を興行し廻りしのみなるが、爰に至りて又文樂座に入るととなりぬ。これ越路が大坂文樂座に出勤せし初めなり。文樂には當時淨瑠璃の粹を集め、太夫は素より三味線も人形も其

頃の名人上手は、殆ど此一座に網羅されたり。今其時の顔觸れを見るに、竹本染太夫が櫓下にて豊竹湊太夫、竹本實太夫、春太夫、咲太夫、なほ地位はやゝ低きも、其頃の人氣ものたる筑前太夫もあり。三味線は有名なる豊澤團平を筆頭として、鶴澤傳吉、野澤吉兵衛、豊澤濱右衛門、鶴澤豊造、人形は吉川才治、今の吉田玉造、吉田松江、吉田喜十郎等の顔揃ひなりき。さて狂言は前が『忠臣蔵』の通し切が『新版歌祭文』にて番附面に載りたる重なる役割を列挙すれば、咲太夫の『桃井屋敷』に越路は其口を勤め、湊太夫の『扇ヶ谷』染太夫の『山科』と春太夫の『野崎村』にて一力の掛合には湊太夫の由良之助、染太夫の平右衛門、春太夫のおかる、道行は筑前太夫のシテに越路、和常太夫のワキにて、越路の役は是迄二三の興行よりも更に一層悪るかりき。されど吉兵衛の仕込に天性の美音は既に先輩の認むる所となりをれり。唯役の軽きと新顔なれば、未だ世間一般の注意

を惹くには至らざりしが、爰に越路に取りては僥倖ともいふべきは、咲太夫は一日勤めしのみにて病氣退をなしたれば、越路は二日目より樂に至るまで、松切の前より引續きて咲太夫の役場を勤め又筑前太夫も缺席したるより、道行のシテに廻り、殊に師匠春太夫が中頃三日程缺席したるを、其代りに越路は野崎村を勤め、何れも相應に語り、敢て先輩の役を傷けざりしかば、新顔の太夫なかくの好評なりき。これぞ越路が出世の端緒にて、同年五月の次興行一座の顔觸は、ほゞ前の通りなりしが、狂言は前が彦山権現九つ目迄、中が楠普嘶切が桑仙人にて番附面は咲太夫の一味齋屋敷、春太夫の小栗栖實太夫の山口八幡と、杉坂墓所、染太夫の六介住家、筑前太夫の礎拍子、湊太夫の徳太夫内等にて、越路は唯杉坂の口一役なりしに、初日前に至りて春太夫、俄の病氣にて出勤なり難きより、急に役替を爲し、春太夫の役は湊太夫が勤むるとなれり。然る

に此時彦山六つ目、須磨浦は竹本津賀太夫の役となりし所、津賀太夫も亦病氣なりしかば、長技太夫之に代り、稽古に取掛りしに、人形使吉川才治より故障を入れしより、長枝は立腹して休場に及びければ、誰にしやうと詮議の末、其札は越路に落ち、越路は初日より長枝の役を勤め、人形の苦情も消散したるは、越路が技倆の勝れたる故にて、なほ越路は長枝の役、彦山九つ目の切をも語りたるが、是又好評にて、大いに面目を施しぬ。抑も此の他人の替役をするとは、歌舞伎にても其通りなるが、地位の低きものがするとなれば、之に當りたる者は頗る名譽とする所なり。初心の内は上の役の替りをなし、首尾よく勤め果せるを以て試験及第となし、是に依りて昇進の道を開くと屢々其例あり。されば後進の者は常に此先輩の代役を狙ひをるとなるが、さて他人の代りは何時來るとも計られず、來る時は俄の事にて、素より稽



古するの違もなければ、之を引受るには豫め多くの語り物を暗んじ、何時大役の我頭上に降りかゝるも差支なき準備をなさざるを得ざれども、是れ一通りの心掛けにては叶ふべくもあらず。偶々寶の山に入りながら、手を空うして好機を逸するとも往々あり。越路は最初江戸にて寄席に出で、毎夜語り物の替る爲めに、非常の苦心をなしたるとは前にも記したるほどなれば、此経験にて彼れは多くの段物を覚えたりしかば、他人の代りといふ時は、何時も差支なく引受けぬ。

當時春太夫の淨瑠璃は今日の大掾の如く、歌舞伎ならば舞臺が大いともいふべき。いかにも其語り口は幅が廣くて、大概の者にては之を勤めると出来ず、よし勤めたればとて却て自家の拙劣を示す譯なれば、大概の者は之を引受け得ず。越路とても當時はまだ成熟の域に達せざる時なれば、素より成效を見るべき筈はなけ

れども、兎に角に春太夫に代り、甚しき失態を見せずして、観客に多くの不満足を與へざりしは何人も感服するところなりきと、當時之を目撃せし者の語るところなり。されば春太夫以外にては、左のみ骨の折れる様子もなく、時としては先輩を壓倒するとあり。未だ幾許ならずして越路の評判高く、師匠は素より文樂座にても又なき青年と大切がり、自然と待遇も以前とは變り来るより、越路も大いに乗地になり、こゝに至りて春太夫が詞の徒ならざるを悟り、益々藝道を勵みたり。

其九 維新の變革

△九州へ旅稼ぎ △荷物の延着 △長崎の大窮迫

爾来越路は引續き師匠春太夫に隨ひ、稻荷文樂座(東芝居)に出勤し、るたりしが、慶應二三年も過ぎて維新の變革に遭遇し、戊辰の年明治と改元せられぬ。此間徳川慶喜の大阪城に據る在り、伏見鳥羽

の戦争あり、錦旗東に向ひ 天皇御親征の思召にて蹕を大阪に停  
め給ふなど、兎角世の中物騒がしく安き心もなかりしが、江戸に於  
ては猶これよりも甚しきものあり。薩摩屋敷の焼討、上野の戦争、  
脱兵の追撃など、人心恟々なるにも拘らず、歌舞伎芝居は不景氣な  
がら興行を打續けたる如く、大阪も京師江戸の要衝に當り頗る騒  
々しかりしにも拘らず、道頓堀は更なり、文樂芝居の人形淨瑠璃も、  
不景氣ながら打續けたるは誠に別世界といふべし。即ち慶應三  
年は春太夫等の一座は、稻荷に四回、京都四條北座に一回を興行し、  
明治元年には上半期に四回の興行をなしたるが、七月の興行を終  
り、越路は春太夫を離れ、鳴戸太夫、筑後太夫、春榮太夫、越戸太夫、三味  
線に龍七、吉作、仙七などを以て一座を組織し、越路の座頭にて十月  
上旬大阪を發して、長崎及び九州地方に旅稼ぎを爲せり。此時越  
路が生涯の失敗として、今に談柄となれるは、當時は今日の如き汽

車もなし、汽船の設備もなく、山陽九州二鐵道の聯絡などは夢にだ  
も見ざる時なれば、九州に下るには陸路もしくは和船に依るより  
外なし。然るに汽船其頃は蒸氣といへりは、漸く此頃より開始せ  
られ、未だ營業の會社としてはなかりしも、各藩主所有の汽船に乗る  
便りはありて、越路等一行は幸ひに鍋島家持の汽船に便乗すると  
を得て、十月七八日頃、大阪川口を解纜したるが、此汽船は既に老朽  
しをりて、機關の運轉自由ならず、川口を發してより下の關に着す  
るまで、實に十一日間の長きに亘り、一行は勿論其他同乗したるも  
の凡そ四十名ばかりありしが、多くは長崎へ上るものゝみなりし  
が、元來蒸氣は早きと聞き恐るゝ乗りたるに、和船よりも陸路よ  
りも長くかゝりたるに、皆々呆れ、斯くては玄海灘を無事に經過す  
べきや、覺束なく、よし經過し得るとするも、長崎まで至るにはなほ  
十數日を要すべしと、上陸を主張するもの多く、他の客も皆々同意

なれば、越路一行も已を得ず下の關にて汽船より上りたるが、さて携へたる衣裝道具は如何すべき。他の人々の大荷物を携へたるは、荷物のみを汽船にて送り、身體ばかり上陸したれども、越路等は今迄の經驗に依り、若し汽船が又々延着し、一行が長崎へ到着するも、衣類道具は未だ着せぬなどのとありては、不都合なりとて、荷物も共に陸上げし、別に早船にて和船の便に荷物を托したり。然るに此興行たるや一切先賄ひなれば、既に長崎までの汽船賃は拂ひたるも、中途勝手に上陸するとなれば、下の關より長崎までの旅費は自便たらざるを得ず。大阪を出發の砌、銘々の給金は恰も此時初めて發行せられたる大阪官札にて受取り、越路が之を預り、れば、兎も角之にて便し行かんと、一行協議の上、下の關鍋町の小松屋といふ、さし宿へ投じたるが、金札の通用は全國一般に未だ信用なく、下の關にては之を受取らざるより、荷物を出すにも、差支を生

じ、一行の當惑は譬へんに物なかりしも、幸ひ小松屋は興行主の知れる間柄なりしかば、此家にて旅費を借り、下の關を出發して七日目に、目的地なる長崎へ着きたるところ、早船で送りたる衣裝道具の荷物は、なかく到着せず、下の關へ問合せしに、確に荷物は送り出したりとのとに、如何せしやらんと案じ煩ひるたるも、少しも消息なく、此間一行の者は見臺、三味線、衣裝などの到着せぬ爲め、興行するとも出來ず、手を空しうして、旅宿にゐると、同地の人などは竊に一行の舉動を怪しむ。そは長崎の例として、凡そ藝人が入込む時は、丸山遊廓の貸席に宿を當る習ひにて、越路夫婦、此時妻女たかも同行をはじめ、一行の者は大壽樓に宿りし所、大阪下りの越路太夫といふ、觸込みなるに拘らず、興行もなさず、一行の者等が時々寄合ては、何かヒソヒソ話しをるを、荷物の不着、小遣錢の不足など互ひに旅中の困難を訴へるとは、知らず、若しも詐欺師などの越

路の名を騙りて、曲事をなす密談にはあらずやなど宿の主人はじめ疑ひはじめ幸ひ大阪より當時野澤勝鳳なる三味線引の來りなれば、彼れをして見せしめ、僞者ならば化の皮を引むいでくれんと、勝鳳を呼び來りて、大阪に越路大夫なるものありやと尋ねしに、勝鳳は越路とは吉兵衛に伴はれ、江戸修業以來の知友なれば訝りながらあるともく、越路は當時若手の錚々たるものにて、大阪にても評判高しといひしにぞ、然らば其越路か見て賜はれと、越路等には知らしめず、勝鳳をして物蔭より透見せしめしに、僞もなき越路大夫なれば、是は又如何なる次第かと驚き且呆れ、名乗り合ひて久澗を叙し、越路より難船の事、荷物延着の事など物語り、漸くにして同地人の疑を解きたるとあり。若し勝鳳が此時長崎に在らざりしならば、越路等は猶も難儀に逢ふべかりしとて、いたく悦びたるが、荷物は遂に年内着せず、明れば明治二年正月廿日頃、漸くにして

到着し此間二ヶ月以上の滞在に、下の關にて借りたる金も早疾くに遣ひ果し、借りるにも知人なく賣る着替等も荷物の中にあるといふ始末にて、一行の困難一方ならず終には皆の者が床屋へ行くとも出來ぬやうになりたれば、越路の妻女たかは、急に男の髮結ふと、髻剃るとなどを覺へて、一行の者の髮髻の總役までをなしたりといふ。

荷物が到着したるより、二月上旬より同所八幡町の芝居にて二十日間興行したるに、評判よく更に二十日間打ち都合四十日間非常の大入にて、稍愁眉を開きし折しも、下の關より向ひに來りたれば、同地へ引返し、新地の芝居にて十日稻荷町にて十日都合二十日打ち、豊前中津へ赴き十日、更に下の關へ引返して、新地にて又十日打ちしが、此時は餘程越路に祟りしと見え、彼れの三味線に連れ來れる龍七は、中津にて重病に罹りしかば、長崎より勝鳳を呼び寄せて

之に代らしめ、中津の興行を終り、一行は先きへ返し、越路夫婦残りて介抱し、るたるうち、龍七の母親が來りたれば、母に渡して歸途に就きしが、龍七は遂に中津にて身果りぬ。又野澤勝鳳が越路を二度までも救ひたるは奇といふべし。斯くて越路は其年の十月大坂に歸りぬ。旅稼ぎに出たるとも屢々あれど、此行ほど難儀をし盡したるをはなしとて、今に一つ話しとなせり。

其十 越路の昇進

△文樂翁菅原配所の段を新作して越路に授く △竹本染太夫の死去 △豊竹湊太夫櫓下となる

九州にては越路種々の難儀に出會せしが、是も亦經驗の一つなり。明治二年の十月に漸く大阪に歸り、其十一月より文樂座へ出勤したり。此時の外題は『出世太平記』と『荻萱桑門』にて越路は高野山の段を語りぬ。

是より先き越路の九州不在中に、文樂座にては櫓下の變動あり。即ち是迄櫓下の地位にありし六代目竹本染太夫は、同年正月、妹脊山『の二の切鱧七上使』を勤め、同三月『八陣守護城』の時より病氣にて出勤せず、遂に同年五月一日七十三歳にて歿せり。此染太夫は曾根崎新地の貸席金熊の主人にて、淨瑠璃は當時必ずしも第一流の語り人ならざりしも、斯界の勢力を有し、越前大掾といひし五代目染太夫の後繼となり、慶應元年正月、文樂座の櫓下に据りし人なり。又當時の鶴澤叶は此染太夫の子なりしかば、大いに引立て、自分の三味線を弾かしめたり。然るに今染太夫歿せしかば、文樂座にては其順序より、又其實力人氣より豊竹湊太夫を染太夫に代らしむるとなりぬ。(此湊太夫は元竹本音羽太夫といひ、竹本土佐太夫の門人なりしも、後河堀口の長門太夫門弟となれり) 明治三年の正月興行は、文樂の外題『菅原傳授手習鏡』の通しにて、越

路は二の切道明寺の中と別に配所の段を語れり。此配所の段といふは丸本になき所なれども當時文樂の主人が新作して時平館と天拜山との間へ差挟み初めて越路をして語らしめぬ。此文樂の主人といふは樂翁と稱し、植村家四代目の主人にて淨瑠璃も一寸語りし人なるが多少文才を有し、語るとよりも寧ろ淨瑠璃を作る方が得意にて段物なれど數編の新作をなし、なほ凱旋源氏の白旗といふ丸本の作さへあり。勿論版行にはならず、其草稿は今も植村家に傳はれりといふ。

樂翁はひとり文才あるのみならず、座員統御の術にも老け人を使ふと頗る巧みなりしかば、内外に人望あり、今日文樂の繁昌を續けるは、此人の餘力といふも過言にあらじ。樂翁の事蹟に就ては他日別に記すべき機會あるべし。越路は此樂翁に將來有望の人として愛せられ、大いに厚遇を受けたり。

同年の三月興行には『義經千本櫻』の通しにて其時番附面の重なる役割は實太夫の「嵯峨の庵」湊太夫の「渡海屋」春太夫の「釣瓶すしや」咲太夫の「川連館」にて、川連の中を竹本中太夫、其次を越路が勤むる筈なりし所、咲太夫の病氣にて出勤せざれば、此時咲太夫歿す、越路は前より引續き、咲太夫に代りて川連館を勤めたり。此場は當時越路の身上よりいへば可なり重き役なれば、自分にも心配し、師匠なども如何と危ぶみし所、案外の上出来にてをさく、咲太夫にも劣らずとの好評を博し、是れが出世の縁となり、遂に同年の九月興行「木下蔭狭間合戦」の「奥御殿」を勤めし以來、越路は切語りとなれり。

同四年正月には「信仰記」に「地藏堂」のシテと「爪先鼠」を勤め、三月には「玉藻前」の「神泉苑」、八月には「伊賀越」圓覺寺の切と「兜軍記」に「琴責」の重忠、九月は「鬼一」に「楊弓」の段、「詮議」の掛合に能登守、十月は「彦山」の「一味齋屋敷」の切、「姫山姥」に「山姥」を勤め、越路は隆々其地位を擧げ

名聲の揚るばかりなりき。

其十一 文樂の松島移轉

△豊竹湊太夫の退隱△竹本春太夫吉田玉造橋下となる

こゝに文樂座の改革に就て一言すべきとあり。そは文樂が是迄興行を打續けるたりし、博勞町稻荷社内より大阪の西端なる松島へ移轉したる事なり。そもく文樂座は前にも述べたる如く植村文樂家代々の經營したるところにして、植村の先祖はもと阿波の産にして、ヤハリ彼地にて芝居師なりしものなるが、今より百四五十年前、大阪へ來りて人形淨瑠璃の芝居興行を始めたるものなりといふ。其頃は人形淨瑠璃も享保寛保の盛時は過ぎて、稍衰微の運に向ひたりといへども、なほ道頓堀には筑後若太夫の二座西と東に櫓を揚げ、其他竹田芝居にて人形淨瑠璃の絶えず興行せられし時なれば、文樂芝居が俄に流行する筈もなけれど、一方に

歌舞伎の全盛を極むると同時に、淨瑠璃は漸次廢れ、遂に道頓堀に其根據を有するとすら覺束なくなりしかば、文樂芝居は其機運に乗じて段々繁昌したり。最初は北堀江市の側、西側芝居にて興行す。是寛政年間のことなり。後稻荷社内に小家を建て、茲に久く興行をなしをりし所、天保十三年水野越前守の改革は、大阪へも波及して宮芝居の禁制となり、文樂座も稻荷社内に興行をなすと能はざれば、一時清水町の濱西横堀御池橋東詰邊りより南方に小家を設け、僅に形ばかりの興行をなせしが、其禁も聽て弛み、又舊の稻荷社内へ復し、文樂は同所東の小家に根據を占めて、此時迄繁昌を續けをりしが、是より先慶應年間幕府の命によりて、大阪市内諸所に散在せる小部の遊廓を取拂ひ、松島に遊廓を設け、中央の町を伸の町と名け、諸事吉原遊廓に倣ひたるが、政治上には維新の大變革あり、幕府は倒れ、王政復古となり、明治二三年に至るも寂寞たるもの

なりしかば、大阪府にては、其土地の繁昌を増さんが爲に、道頓堀の芝居師三榮と文樂とを呼出し、其小家を松島に移轉すべき勸誘あり、三榮文樂共に其命を奉じて、彼地に芝居小家を建築し、三榮は歌舞伎文樂は人形淨瑠璃の興行をなしたるが、歌舞伎は流行ずして三榮の芝居は聽て退轉せしも、文樂のみは同地に根據を固めて爾來數年間繁昌せり。即ち文樂が大阪府の命に依り、松島に小家を建築したるは、明治四年の事にして、其冬工事悉く落成したれば、同五年の正月開業式を舉行せり。(今の松島八千代座は其時の文樂座なり)

此時移轉に就ては、文樂も小屋を建て、又藝人等もこゝに出勤すべき旨を諭示せられ、竹本春太夫、吉田玉造などは之に盡力したるの廉を以て、自然と勢力あり。且其藝に於ても春太夫といひ玉造といひ當時其右に出るものなく、且是迄文樂の櫓下たりし豊竹湊太

夫は既に老人なりしかば、松島移轉を機として退隱し、遂に櫓下の地位を春太夫に譲ると同時に、吉田玉造は人形遣を以て是又櫓下に名を列するととなれり。

豊竹湊太夫は明治四年正月「信仰記」「冷光院庵室の段」を語り、同三月に「玉藻前」の「御殿」より「梅壺」の切までを勤め、同八月「伊賀越」の「沼津」を、九月「鬼一」は番附だけにて休み、同十一月「彦山」は病氣ながら勤めて退隱し、其後は唯門弟の教授をのみなし、明治十年七十八歳にて歿す。

松島文樂初興行の外題は「繪本太功記」の通しと御祝儀に「三番叟」を出し、春太夫の「尼ヶ崎越路」は大徳寺焼香を勤め、三番叟はシテ越路、ワキむら太夫、ツレ三根太夫等にて三味線は豊澤團平、新左衛門源之助なりき。此時非常の大入にて正月十三日より同三月八日まで五十三日間打續け、當り振舞をなしたり。今日にては却て珍



らしからざるも、此頃は維新後間もなく凡て興行物の振はざる時  
なれば、五十餘日の興行は稀有の人氣なるを證したるなり。次  
興行は三月廿四日より五月廿日まで、是も大入四十六日間打續け  
ぬ。此時の外題は『大江山』と『二十四孝』にて春太夫の「勘助住家」に  
越路の「謙信館」なりき。

此時春太夫六十五歳にして越路は實に三十七なり。先輩として  
は染太夫、咲太夫、湊太夫等は或は歿し或は退き、今は師と仰ぐ春太  
夫に實太夫あるのみ。而して春太夫も既に老境に入り、其全盛を  
保ちをるも寧ろ越路といふ人氣もの、弟子を有するが故なり。  
實太夫に至りては故長門太夫の甥に當れると、斯道の古實家とし  
て、又多少文才を有すると故參なるとを以て、地位は悪からざるも、  
藝に於ては寧ろ第二流の人なりしかば、當時の人氣は全く越路一  
人にありしなり。なほ一言すべきは故長門太夫と相並び近世の

名人として今も其盛名を慕へる豊澤團平は、是迄湊太夫を弾きを  
りしが、湊太夫退隠したるを以て、松島興行以來春太夫を弾くと  
なりぬ。

爾來文樂は數年間此松島に櫓を揚げて興行を續けしが、春太夫は  
なほ三月と五月の興行に出勤したる後、六月には越路等を連れ播  
州姫路に赴き、阪本町の芝居にて、出し物は『太功記』越路の「杉の森」  
に春太夫の「尼ヶ崎」姫路當込の狂言なりき。是より春太夫は團平  
と共に九州へ赴き、越路は大阪に歸りて、七月には久方振に稻荷文  
樂に出勤して『八犬傳』の「芳流閣」を語り、九月より松島に出勤し「朝  
顔話」の「島田宿」を語りぬ。同年十一月は『出世太平記』、『伊勢物語』  
『冥途飛脚』にて越路は新町の段を語りしが、此月より従來の曆法  
を廢し、太陽曆を用ゆるととなり、十一月三日を以て明治六年の一  
月一日と改正せられしかば、此十一月興行も亦一月興行と改まれ

り。此頃越路の勢ひは旭日の登るが如く、其語り物も以前とは異なりて、漸次重き役に進み、其一二は前にも擧げたるがなほ、同年四月には『先代萩』の「御殿」を語りぬ。八月には京都四條南座に出勤し、『中將姫』の「雪責」を勤めたり。

其十二 春太夫と文樂の衝突

△春太夫と團平の一派文樂を去る△越路獨立して文樂に據る△春太夫の退隱△竹本實太夫橋下となる、越路山科を語る△團平越路を叩く

明治六年の十一月十五日より、松島文樂にては『安達原』と『日蓮記』とを出したるが、此興行二十四日間にて打揚げ、冬休みとなりたれば、越路等は又長崎より九州地方稼ぎに赴きぬ。其時の一行は、戸太夫、三根太夫、組太夫、南部太夫、路太夫、越の太夫、宇佐太夫等に於て、三味線は廣助、友之助、大吉、龍糸、廣四等なりしが、頭取は氏戸太夫なりき。是迄越路の三味線は豊澤新左衛門なりし所、此時より廣

助となれり。十二月二十一日乗船し、此前の如き失敗もなく汽船にて九州へ赴き、長崎より熊本、福島更に長崎に二の替りの興行を爲し、久留米、山内、又福島にて打ち佐賀より又久留米、前原、博多等を興行し廻り、何れも好評にて大入り、大當り、以前の失敗を回復せり。九州にあると殆ど一年、翌明治七年の十一月廿一日に事無く歸阪したるが、既に此時は文樂冬休みの季節なりしかば、十二月二日より又々神戸へ赴き、こゝにて大入を取れり。然るに越路が九州行きの留守中となりき、春太夫及び團平と文樂座の仕打との間に給金のとにて少しく紛紜を生じ、春太夫は自分の身上に就ては、寧ろ等閑に附するの意向を有したるも、何分にも多くの門弟を率ふるのとて、黙して止むべきにあらず、殊に若年の頃より辛酸を嘗め、同情深き人なりしかば、門弟の爲めに大いに仕打と談判に及びしも、其意見の遂に容れられざるより、春太夫は團平および門弟一

同と共に袖を列ねて文樂を退きしにぞ、文樂にては大いに狼狽したるも、素より事を行掛り上、中途にして主張を曲るとも出来ず、双方感情の衝突にて物分れとなりぬ。依て春太夫は團平及び門弟其他情實を同うせる人々と一座を組織し、竹内といふを銀方となし、大江橋北詰の寄席等にて、人形淨瑠璃を興行し、堀江にても行ひ、大いに文樂座の向ふを張りしかば、文樂は忽ち影響を蒙り、人氣阻喪し不座のみ打續き、文樂は之が爲めに恐慌を起し、何とか防戦の策を講せざるべからず。然るに越路は當時最も流行兒として、随分外見も張らねばならぬ時節なれば、其以前より借金にて苦しみ、既に文樂にも少なからざる前借のありしを幸ひとして、文樂は是より先き人を九州に走せて、先づ越路を迎へしめなるが、越路は若し文樂に随ふ時は何となく師匠に反抗するが如くに見え、さればとて師匠に随へば前借の始末附かず、此所殆ど板挟みとなり、如何

はせんと、姑くは其去就に迷ひしも、文樂より迫ると日に急にして進退極り、遂に春太夫一派より離れて、住太夫、梶太夫、組太夫、實太夫、重太夫、彌太夫等と共に文樂に入り、明治八年の一月十八日より、興行を始めたり。此時の外題は「菅原傳授手習艦」の通しにて、越路の役は四段目の切松王首實驗なりしが、仕合せと文樂は當込み、大入りなりしかば、四十四日間打續けぬ。春太夫門下にして越路一人、いはゞ其敵方なる文樂に投じたる譯なれば、果して物議を惹起し、越路こそは師に楯を衝くものなりなど、大袈裟に吹聴するものもありて、非難の聲頻りと喧囂を極むれども、前陳の次第なれば如何ともする能はず、まゝよと其等の攻撃には顧みずして、勤めをると、同門の者にて種々の難題を持掛けしかば、大いに困り、當時春太夫の三味線を弾きゐる豊澤團平は、斯道の先輩にして、勢力家なれば、團平の口を借りて、此間の紛紜を調停

せしめんとし、先づ越路の主張としては、素とく師匠に反抗の意にて文樂に投じたるにあらざる前の事情を打明け、よし又斯の如き事情なしとするも、自分が文樂に入るは、決して師に對し不名譽を買ふものにあらず、今日の形勢より春太夫門下が獨立して他に一旗幟を樹つるは、寧ろ師の名譽なれば、自分はいかなる非難あるも、少しも身に疚しき所なければ、飽くまで文樂に止り勤むべければ、此意を宜しく傳へられよと、師弟間の仲裁を頼みしかば、團平は勿論のと、春太夫とて此間の消息に通ぜざるものにあらざれば、沸騰する門下を慰撫し、漸くにして事なきを得たり。越路の如き最も平和の生涯を送りし人に取りては、此時の騒ぎは非常な大波瀾といふべし。而も是れ越路が當時最も賣つ子たるを證明するものにして、今日より之を見る時は、春太夫も既に彼れには一步を譲りしなり。長門太夫以後屈指の名人として知られたる春太夫既に

に老麟の嘆なくんばあらず。世間の人氣は全く此時越路に移れるを見るべし。是より春太夫は文樂と全く分離し、たると殆ど二年に及びしが、明治十年の春に至り、兩者の間に中裁を試むるものあり、こゝに再び和解なりて、再び文樂に入るととなりしが、此時は既に春太夫の晩年にして、其役の如きも番附面に上りたるのみ、一興行として満足に勤めたるはなかりき。即ち十年の三月興行に、文樂にては『八陣』と『加賀見山』を据ゑ、番附も既に出來上りたる所へ、春太夫との和解なりて、俄の出勤なれば、急に春太夫の語り物として『阿波鳴門』三を加へたるが、春太夫は之を語ると數日にして病氣となり、此興行を終らずして休業したり。思へばこれぞ春太夫が文樂に於る名残りけり。同五月の興行は『忠臣藏』の通しにて、四ツ目の切と七ツ目の掛合に由良之助を春太夫に振付けありし所遂に出勤せず。

四ツ目は彌太夫が代り、由良之助は實太夫が勤め、春太夫は其年の七月廿五日、遂に歸らぬ人の數に入りぬ。時に年七十歳なり。當時春太夫の文樂に出勤したるは、實は越路等の幹旋與つて力あり、一旦文樂と物分れとなり、之と對峙せしも、寄る年波に昔の佛も失せて、兎角興行も涉々しからざるより、越路ははじめ彼れをして、晩年を安く送らしめんと、再び文樂に入れしも、實は名ばかりにして、其勢力は素より越路にあり。故に此興行には越路は、斯道にて最も重き役と稱せられ、九段目山科を勤むるとなれり。これ迄は此山科の段實は春太夫の語りものなりしを、此時より越路が役となり、春太夫は其四段目判官切腹を勤むる筈なりしも、前興行來病氣にて出勤なり難きより、番附面は春太夫として、四段目は彌太夫が代り、由良之助役は實太夫が代りて勤めしなり。越路が此時の口上は左の如し。

乍憚口上

春曉之節に御座候處、御區中御旦那様益々御機嫌能被遊御座、恐悦至極に奉存候。隨て當替り狂言之儀、假名手本忠臣藏大序より、敵討まで興行仕候に付ては、右九段目役場師匠竹本春太夫相勤可申、管之處何分未だ病後の儀に御座候、故右役場私共相勤候様、師匠より申聞候に付、誠に未熟之私共身に取、難有仕合に奉存候。しかれ共、何分大役の儀に御座候、故達て辭退仕候へ共、藝道修業之事故一入勉強可致様申聞候に付、不願憚をも押て相勤め申候へ共、不調法之私共誠に猿の人まね御笑ひ草と思召され、御最負の御除光を以て首尾よく相勤申度、御引立之思召を以て、何卒御開濟之程偏に奉希上候以上。

竹本越路太夫

これ實に或意味の家督相續といふべし。越路が漸く其全盛期に入るを見るべし。是と同時に春太夫は五月興行限り、櫓下の地位を辭せり。當時の人氣より推す時は、越路の上に出るもの殆ど此座になく、衆望もや、彼れに傾き、越路直ちに春太夫の後の櫓下に

擬せられたりしも、太夫の地位は左程に高からず、相撲でいへば未だ三役に入らざれば、越路は自重して之に就かず、藝はやゝ次なりしも、彼の長門太夫の甥にして、出身の古きと斯道の古實家として人望ある竹本實太夫を推して、先づ櫓下の地位に据ふとに同意せり。さて爰に越路の三味線に就て一言せざるべからず。最初に於ては竹澤龍造の弟子の龍之助に就て學び、稍上達するに至りて三代目鶴澤清七の門に遊び、清七の歿後更に三代目野澤吉兵衛を師とし、藝人仲間に加はりしと既に詳述したる通りなり。吉兵衛歿後は、同門なる野澤勝鳳之を弾き、文久三年九月大阪に歸り、春太夫一座に加はり、京都の興行に隨ひし時は、春太夫の三味線四代目の吉兵衛が弾いてくれ、其後越路の三味線としては野澤安次郎、豊澤新左衛門、明治七年九州に赴きし時より豊澤廣助が越路を弾きたり

しが此時に至り長門太夫以來、代々の座頭を弾き自ら立三味線の名ありし豊澤團平は、長門太夫の後、豊竹湊太夫、春太夫と三人の夫を持ちたりしも、不幸にして何れも團平を残して、黄泉の客と先立ちしかば、此未亡人は更に年若にして人氣を一身に脊負る越路太夫と手を握るに至りぬ。明治十年の五月興行「忠臣蔵」の時、春太夫の役場を勤むるを以て、一旦は彌太夫に嫁せしも、其次興行より越路の配遇となりぬ。是より數年間、越路と相提携したるにぞ玉造の人形と合せて、世之を文樂の三絶と稱したり。

其十三 太夫としての越路の地位

△三都太夫三味線人形番附の位附

攝津大掾が越路の名を以て始めて文樂座に出勤せしは、慶應元年の三月興行よりにして、爾來十三年の經歷は回を重ねて述べたる所にして、其人氣は早く既に其一身に集りたれども、太夫としては

逐時如何なる地位を占め來りしかといふに、元治元年の『三都太夫  
三味線人形競鑑』には未だ其名現はれず、慶應三年の番附には、

東

西

竹本攝津大掾

同	同	同	同	同	同	前	小	關	大
竹本越前太夫	竹本長枝太夫	竹本組太夫	豊竹駒太夫	竹本梶太夫	竹本津賀太夫	竹本長尾太夫	竹本越太夫	竹本春太夫	竹本染太夫
同	同	同	同	同	同	前	小	關	大
竹本巴勢太夫	竹本久太夫	竹本氏太夫	竹本大住太夫	豊竹生駒太夫	竹本組太夫	竹本越太夫	竹本彌太夫	豊竹若太夫	豊竹湊太夫

太夫としての越路の地位

右の如くありて、山城掾の勸進元に咲太夫、對馬太夫の張出しなり。越路は此時漸く東二段目の末に張出されたるが彼れより先輩にして後に長登太夫と改名し、越路の前に文樂の櫓下になりたる竹本實太夫は、西二段目の三枚目にありて、今の彌太夫其當時は長子太夫といひしが、西二段目の八枚目にありて、越路と伯仲の間に在りたれば、越路は僅に二段目の七八枚目なるべし。然れども七八枚目に入れては他に苦情もあり、左ればとて一番尻に置くは藝の上より氣の毒なりといふ點にて、彼れだけを別に置きしものと思はる。以て越路が當時の地位を知るに足るべし。明治二年にてもなほ其地位は進まず、ヤハリ西の二段目の張出しに相生太夫(後の綾瀨太夫)と並び、同四年にも同じ地位に動かず、同六年に至りて幕の内に進みしがヤハリ極りし地位はなくて、西の重太夫と相對して東の別席に置かれたり。即ち此時は湊太夫の後見に、越太夫





『忠臣蔵』の九段目を語りて、聲曲界の權力を占め、同十二年には前頭の書出に進み、翌十三年には西の小結に昇進し、十七年には西の大關、二十年には東の大關となり、爾來其地位を保ち、今日にては番附は姑く措き、事實上の横綱たるには何人も異存なかるべし。

其十四 越路の大流行

△旅稼ぎに忙殺△九州四國巡り△高知行きの奇談

越路の評判漸く高くなるにつけ、彼れの出勤を申込むもの頗る多くして、諸方へ出稼ぎする又此前後を最とせり。明治八年六月廿八日より松島文樂にては『布引瀧』に『河原の達引』と『千兩幟』を出したるが、此興行僅に二十日にして樂となり、直ぐ夏休みとなりたれば、安堂寺町心齋橋東へ入る明地にて、八月一日より七日間涼み芝居を興行し、同八日より九月四日まで、千日開地に付き涼み芝居、これ千日夜興行のはじめなり。何れも大入にて千日打揚げ後、堀江

橋の某樓にて當り振舞あり。明治九年七月十四日より文樂にては『出世太平記』『蹙仇討』『苺萱』及び『大經師昔曆』を出したるが、此時既に暑中休暇の季節に入りしにも拘らず、文樂にては強ひて興行をなしたるより、兎角一座の者の悦ばざる所なりしが、人氣も沙々しからず、初日以降不入續きなりしかば、僅か七日間打ちしのみ。依て越路は阿波徳島より讃岐の高松、土佐の高知等四國廻りをなしたるに、何れも大入なりき。聽て歸阪したるも、此年は處列拉病流行しければ、諸興行物停止を命ぜられ、十月十二日より十一月十一日まで、凡そ三十日間休業したり。明治十年六月十八日より文樂は『三十三間堂』に『北條時頼記』を出し、此興行を終りたる後、天神橋の下流なる大川筋に、劔先船四艘を繋ぎ、納涼の船興行を開場したり。これは珍らしきことなれば、非常の大人氣、餘りに雑鬧を極め、喧嘩等起りたるより、遂に中途にし

て休場したるは残念なりしも、淨瑠璃船興行は之が始めなりきとぞ。此興行を終り越路は奈良へ行く筈にて、七月廿五日出發せんとしたるに俄に差支へ、一日間延引したるに恰も其日豫て病中なりける師匠春太夫は急に病勢革り死去したるにぞ、且つ驚き且つ歎き、其葬儀を營む爲め、急使を奈良へ走せて三日間の延期を申込みぬ。

同年十二月十四、十五の兩日道頓堀中の芝居にて、故人嵐璃珪追善の爲め二日間興行。同十六日より紀州和歌山へ赴き十日間。同月三十日出發尾州名古屋へ赴き、翌十一年の一月三日に宮へ着同六日乗込にて八日より十四日間興行したりしが、同地方は歌舞音曲の發達したる所とて、越路の淨瑠璃には耳を傾け、初日以來日々の大入に、場は悉く賣切れて立錐の餘地なく、客を謝絶すること日々幾人といふ數を知らず、據所なく入れたるも、素より坐するに席

なければ、空地といふ空地に客を坐せしめ、果ては舞臺一盃に客を満すに至り、前後になき大入。歸途勢州龜山にて文樂の迎ひに逢ひ、一月二十六日歸阪せり。

十一年の暑中休みには、堺大寺にて十日間、京都極にて十八日間興行、其年の冬休みには和歌山行き十一日間、翌年一月七日より歸途堺の住吉座にて七日間興行、此時吉田玉造の人形一座も同行せり。

十二年四月三十日乗船し下の關へ赴く、同所にて十五日間打ち大入なりしを以て更に日延を願ひ出しも、ごた付きたれば止め、筑前博多へ渡り、久留米に赴き、今町の芝居にて六月七日より十五日間興行。夫より長崎、熊本、佐賀等へ行く積りなりしも、折ふし同地方悪疫流行せしにより、一座を解きて思ひく歸阪したるが、同年九月廿九日より更に岡山へ赴き、十月二日より中島座にて十七日間

其れより作州津山へ行き、再び岡山へ歸りて二度目の興行。西大寺、玉島より讃岐觀音寺に渡り、同所にて年を越し、伊豫川の江、讃岐琴平にて興行する内、舊節季となりたれば、暫時休業し、二日間琴平神社へ奉納芝居を打ち、二月二十日頃尾の道へ渡り、廣島柳井津宮市等を打ち、萩山口より九州へ渡り、豊前中津、其れより長崎、熊本、久留米、福島等を十一月中旬まで打廻り、同月二十日に歸阪し、十二月九日より紀州和歌山へ行き、湯淺、黒江等にて興行漸く十四年の一月大阪に歸りたり。

十四年一月十九日より文樂に出勤したるが、久し振にて大入五十九日間興行。狂言は『大江山』に『中將姫』なりき。三月十七日より神戸へ赴く。此頃の越路は至る所、喝采を博する爲めに、さながら浮氣息子の諸方を飛廻る如く、文樂には少しも尻の落付ぬ模様なり。六月一日より堺大寺へ出勤、これは竹本山四郎(山城掾)の一世

一代を頼まれたるに因りてなり。當時大阪にては夜興行を許さざりし故、わざと堺まで持出したるものなりと。八月六日よりは京都四條北座へ出勤、狂言は『狹間合戦』と『堀川』にて七日より十二日間興行、二の替りは『八島日記』に『仙臺萩』、『四ッ谷怪談』と『歌祭文』なりき。十一月十日より五日間堺にて興行。十二月十九日より三日間尼ヶ崎、廿三日より同じく神戸にて興行。一應歸宅し、十五年一月一日より兵庫の芝居にて十二日間打ち、同十五日歸阪せり。四月廿三日より堺の大寺、六月廿日より三日間松屋町生國魂御旅所にて、文樂座の涼み芝居を催ふし之にも出勤したり。九月は京都へ赴き、十一月十日より天満神社裏門の小芝居にて三日間、十二月十八日より三日間茨木へ赴きぬ。越路は四方八方に駈廻り、殆ど選ぶところなきものゝ如し。

十六年一月は京都に赴き、『忠臣藏』と『安達原』とにて、三月初日を出

し七日目に至りしが、大雪にて寒氣凜烈の爲め入りなく、已を得ず、中止して十八日に歸阪せり。三月中旬に至り會津の小鐵が興行に係る、京都の芝居へ招かれるところ事故ありて開場に至らず、空しく數日を遊び暮したる後、四條北座にて素淨瑠璃を興行し、十日間打ちて歸阪しぬ。四月一日よりは松島吉田卯之助の興行に、博勞町稻荷北門の小家へ出勤し、十日間興行せり。是等文樂以外の興行には、越路の心にもなき出勤恐らく少からざるべし。即ち越路の人氣あるを見て、所謂顔役なるものが彼れを利用せんとしたるも多かるべし。而して越路は縱令其出勤を迷惑と思ふも、弱き商賣の藝人のとなれば、斷然謝絶する譯にも行かず、據なく彼等の依頼に應じたるもあるべし。誠に此間の興行は玉石混淆にして、純然たる旅稼ぎもあれば、或者の花會に類似したる如きものもあり。されど必竟は越路が當時の流行兒となりし爲め、彼地からも

此地からもと招びに來り、殆ど引張風となり、之が爲め大いに迷惑をしたるとも少からず。其迷惑の最も甚しきは、高知行なるべし。越路は此頃高知の江戸昇なるものより、相談を受けて大阪に來り、鶴澤勝其時高知より二人の者、江戸昇の使命を受けて大阪に來り、鶴澤勝七の手より其相談を越路へ持掛しところ、越路は此年都合ありて高知に行くに能はざりしより、體よく謝絶したれども、右二名の使ひの者何か事故ありて、久しく歸高せざりしに、江戸昇は始めより相談は纏るものと信じ、諸般の準備を整へ暑中休みの來るのを待ちをりしが、凡そ四五日間に報告をなしたるより、江戸昇は是迄都合ありて來ると叶はずとの報告をなしたるより、江戸昇は是迄に成したる準備全く水泡に屬するのみならず、金主其他の關係者に對しても、申譯なき次第なりと思ひ、迫り、割腹して死したりしかば、高知にては一問題となり、是非越路を呼迎へて興行せしむるに

あらざれば高知人の名折れ、且は割腹して亡せたる江戸昇に對しても濟まざる義なりと、お國人の意地強く、更に六名の者を委員に選び、大阪へ上して越路に直接の談判を試み、江戸昇は全くお前の爲めに敢なき最期を遂げたとなれば、是非來てくれとのとなり。越路も是には當惑して、一旦は斷りたるもなか／＼聞入るべき氣色もなく、若し我等六人の云分を立てざるに於ては此方にも考へありなど、随分手荒きともしかねまじき權幕、殆ど脅迫がましき強談を、持込まれ、人氣の激昂したる最中なれば、此上謝絶すれば如何なる椿事を惹起すやも謀りがたし、又一方より考ふれば、何も彼も先きの越路にて此變事を招きたりとはいへ、兎に角自分の興行に關して、齟齬を來し、其責任を明かにする爲めに自殺したる江戸昇は、誠に氣の毒なる次第なり。旁々越路は曲げて彼の地へ赴き、亡くなりし江戸昇の爲めに追善を營まば、自づと激昂したる人氣も

鎮まるべし、但し普通の興行にては、前に斷りたる事情もあれば、故人に對しても相濟まず、それに就ても自分一人極ても外の者が承諾してくれては叶はじと、其事情を團平に打明し、斯々の次第なれば、自分は無報酬にて彼地に下らんとするが、一臂の力を貸してくれまじきやと相談したるに、團平はもと／＼藝人根性を離れたる男なれば、お前さんが義侠の爲めに行きなさるなら、私もお付合をしやうと、快よく承諾してくれしかば、越路はいたく悦び、聽て六名の委員に向ひ、一旦はお斷りをしたれども、江戸昇さんの敢なき最期に對し、且は諸君の御熱心の程も承り、此上は如何なる事情を排しても、御地へ参るとすへし、されど先きには江戸昇さんにお斷り申したる事情もあれば、金を貰ひ興行としては参ると出來ず、依て万事自辨にて往き亡くなられし人の追善の爲めにすべしと返答したれば、六名の委員も深く其好意を悦び、いそ／＼高地へ立歸らんと

するを見て、文樂座又は門弟共は、深くも越路の身の上を氣遣ひ、委員の人々は、万々左様とはあるまじけれど、氣の荒きお國人の、万一にも江戸昇の變死を以て、越路のなす業と誤解し、彼地に赴き復讐される如きとありては、由々しき大事なれば、師匠は何と云つても容易に遣るとは出来難しとて、此方の云分もなか／＼手強かりしが、委員等は、万々さる間違なき事を受合ひ、越路の一身に取りては、我等一命にかけても保護すれば、其邊は安心ありたしとの誓書を入れ、漸く事濟みとなり、約束の暑中休みを待ちゐたりしが、六月十五日より、文樂座にては、『彦山』に、『伊勢物語』と、『日本振袖始』にて、越路は、『春日村』を勤めたるが、此興行日數僅か二十八日にて、打揚げ後は暑中休みとなりしにより、高地よりは久保田某、横川某の二人迎ひに來り、一行は越路、團平、春榮、太夫、綱榮、太夫、小三郎、勝七等八九名にて、七月十七日神戸を出發し、汽船青龍丸にて翌十八日浦門へ着

十九日初日にて『先代萩』、『中將姫』、『堀川』、『歌祭文』等にて四日間追善を営みしかば、人氣大いに引立ち、日々破るゝばかりの大入、同廿四日無事打揚げ歸阪したるが、地方興行中此時ほど當惑したるとなしと、越路今に人に語れり。

其十五 越路の全盛期

△越路橋下となる △御靈文樂座の開場 △團平文樂を去る

越路が慶應元年丑の三月に、始めて文樂へ入りし時は二段目の口を語り、其座に列する者は過半彼れが先輩なりき。其内にも當時既に隆々の名を得しもの、染太夫、湊太夫、咲太夫、春太夫、實太夫あり。其後年を経ると十九、彼れが修業の功を積み、駸々として藝道の進むに従ひ、染太夫、湊太夫、咲太夫、春太夫、何れも世を去り、今や唯一人の實太夫あるのみ。而も實太夫既に老境に達し、明治十六年一月師の名長門太夫を襲ぎ、四代目となり、同月文樂座橋下竹本長登太

夫(長登)は長門太夫なり當時國號を冠するとを禁せられしかば文字を變じて用ひたり竹本山城掾の山四郎といへるが如しにて「祇園祭禮信長記」に「花子の段」を勤め潔く櫓下の地位を退き自分は文樂の後見としてなほ暫時出勤せしも後二年にして退隠しぬ。されば越路は十六年の四月に其の絶倫の技能と大なる人氣とを脊負て有實なる文樂座の櫓下となりぬ。是より先き即ち十五年の九月會議を開き三味線を櫓下に列するとし當時の勢力家なる豊澤團平之に据るととなりしが是迄三味線を櫓下に据るの例絶えてなきとなれば斯界にも多少の物議ありし中にも吉田玉造はいたく反抗を試み彼是悶着を惹起して事や、面倒とならんとせしかば越路をはじめ竹本氏太夫桐竹紋十郎吉田玉治等の重立たるもの双方の間に立ち調停を試み殊に玉造を慰撫して漸く納得せしめたり。されば文樂座の番附に此時より櫓下太夫竹本越路

太夫三絃豊澤團平人形吉田玉造と此三人の名を列するととなり爾來其慣列を今に傳へたり。狂言は「大江山」に「歌祭文」及び「國姓爺」にて其重なる役割を示せば「吉野山の段」谷太夫「頼光館」の次が長登太夫にて切が彌太夫「羅生門」が氏太夫「保昌屋敷」の次が時太夫にて切が住太夫「人身御供」が谷太夫と染太夫「野崎村」の中が彌太夫にて切が越路太夫「樓門」が時太夫「獅々ヶ城」が重太夫なり。又三味線には團平廣助勝七與造吉三郎等にして人形は立役に玉造玉治玉助あり女形に紋十郎東十郎ありて先づ當時の粹を集めたるものなりしかば大評判好人氣にて日數五十日間の大入を續け三十日目に藏入をなし座主仕打の悦びはいふまでもなく當り振舞をなし其費用の幾分を文樂座より支出したりしが此當り振舞なるものは越路と團平とが櫓下に列したる祝ひを兼ねたるものなれば六月五日千秋樂の日に新卯にて祝宴を開き其入員は五

十名の多人數にて會費の不足金は皆越路と團平とが負擔したりといふ。同年六月十五日より文樂にては『彦山』と『伊勢物語』と『日本振袖始』を出し越路は春日村を勤めたり。此時竹本重太夫退座重太夫は是迄殆ど越路と相並んで進み來りし人なり又竹本住太夫も前興行より休業し古老はいよく其跡を絶ちて越路太夫の獨り舞臺とはなれり。

同年七月より土佐高知に赴き歸宅後天満天神の裏門芝居塚の卯の日座道頓堀戎座等にて興行し九月一日より京都に赴き同月廿八日より文樂座に出勤此時の狂言は『播磨瀧浦の朝霧』なりき。これ歌舞伎にてする『小割傳内』をはじめて淨瑠璃に新作したるものにて越路は八鬼山峠の段を語りぬ。文樂の十一月興行は『鬼一』と『日蓮聖人』翌十七年一月は『太閤記』の通しに式三番叟三月は『玉藻前』

に『中將姫』五月は『竹取物語』に『安達原』『國言詢音頭』なりしが『竹取物語』は折しも弘法大師一千五十年忌に相當しければ『いろは物語』を接合せたる新作にて文樂翁執筆し越路は臥龍閣の段を勤めたり。六月は『賢女鑑』『二十四孝』『花上野』に『昔八丈』七月興行は『八犬傳』『矢口』なりしが折しも天神祭にて芝居不入なりしかば中止し同廿九日より道頓堀中の芝居にて五日間八月六日より神戸楠公社内多聞座にて十三日興行せり。文樂座は去る明治五年博勞町稻荷社内より今の松島に移轉してより茲に十二年間興行せしが其地や西方に僻在し三榮の歌舞伎芝居は早く退轉し文樂座の人形淨瑠璃は越路玉造團平等の名人を集めたるを以て道に繁昌せしもなほ十分に客を引くに不便あり殊に文樂芝居は其客筋上流に多ければ座主は大いに鑑みる所あり依て平野町御靈社内に劇場を建築中なりし所漸く此頃新



築落成に及びしかば、松島文樂座は明治十七年の上半期に、以上五  
 興行をなしたる後、暑中休暇を機として、直ちに御靈新築の芝居へ  
 移轉するよとなれり。  
 御靈文樂の開場は、實に明治十七年九月廿四日にて、狂言は「菅原」の  
 通しにて、三段目の後に、開業式御祝儀の「壽式三番叟」の一段あり。  
 此時の重なる役は、式三番叟越路太夫、彌太夫、浪太夫、常子太夫、今の  
 越路にして所作事、壽千代の契りは、時太夫、春榮太夫、路太夫、越代太  
 夫、三味線は、廣助、吉兵衛、綱造、勝市、丑之助、吉鳳にして、人形は、玉造、紋  
 十郎、玉助、玉治等なりき。場所が大阪の目貫なる船場と、東京でいへ  
 ば、魚河岸ともいふべきイナセの鞆との中間に位することなれば、  
 其人氣は非常なものにて、大入大當り、廿四日より四十日間の興行  
 十一月四日千秋樂を告げしが、「菅原」にて當りし廉を以て、同五日天  
 満宮へ總一座人力を連ねて参詣し、紀念の額を奉納し、小山屋にて

當り、振舞の宴を開き、頗る盛會を極めたるが、唯此時文樂の三絶と  
 稱せられし、豊澤團平の退座せしところ、遺憾なれ。  
 其理由を繹ぬるに、そも、此團平は誰も知る如く、太棹社會にて  
 は、近世の名人、否、其の上を通り抜けたる豪傑にて、未だ弱冠の頃よ  
 り、長門太夫に見出され、其、絃手となりて、技藝を研きし以來、長門の  
 絶技と相俟つて、初めて満足に其、驥足を伸したるなり。されど、長  
 門太夫歿して、後は團平の眼中に一の名人上手なく、長門太夫は此  
 團平が弾かせて貰ひたれど、他は此團平が弾いてやるのだと、高言  
 せしくらゐ。又實際太夫の方でも、團平の技藝には舌を巻き、其高  
 慢の鼻を挫くもの一人もなく、誰も一目置きたるなりしことなれば、  
 座主仕打の如きも、素より彼れの眼中になかりしなり。是より先  
 き、明治七年、春太夫が文樂座と給金のとにて、紛紜を生じたる時、團  
 平も亦謀叛人の長本となり、春太夫と一味して、文樂を苦しめんと

し、互ひに門下を率ひ、袂を連ねて退座せし如きは、其一例にして、是等文樂の落武者は、其後諸所にて興行し、必ずしも永續はせざりきといへども、反抗の氣脈を通じて、隱然文樂に對して一敵國をなし、おたり。然るに明治十六年の暮頃より、是等反對黨を一團に纏めて、大いに文樂に當らんとする者ありて、博勞町稻荷社内に彦六座を新設し、十七年の春より人形淨瑠璃の定芝居を興行しはじめたるが、こゝは場所も大阪の真中に近く、殊に以前人形淨瑠璃のありし所なれば、客足も繁く、頗る繁昌して、松島文樂は之が爲めに影響を蒙り、由々しき大事と思はれたれば、文樂にても對抗策として、御靈社内、小家を新築し、越路團平、玉造の三人へ相談に及び、今後長く三人の者は文樂を離れず、同座の爲めに充分力を盡しくれよとの懇願なりき。其時は三人とも文樂の頼みに應じ、今より一層骨を折り、互ひに同座の爲めに盡すところあるべしと誓ひたれば、文

樂にては明治十七年九月御靈に移轉し、同廿四日より初日を出すとなりしが、彦六座にても同年九月開場式を擧ぐるとなり、同座の仕打は此際團平を連れ來らんと、團平に相談せしに、團平は元來無頓着なる流義なれば、前の文樂の約束には重きを措かずして、容易く引受け、開場式とあれば、越路にも話し御祝儀一幕ぐらゐは助けて貰ふべしと、自分極めに一座の者へ返答し置き、さて文樂へ相談すると、ドッコイ、そうは行かず、文樂にては越路及び團平を貸すなどは思ひもよらずとて、斷然其交渉を退けたるより、彦六座にては團平に迫り、團平は遂に行掛り、上文樂を去らざるべからざるに至りしより、自分一個にて、彦六座に投ずるとはなりぬ。是より先き、竹本重太夫、今の大隅がまだ春子太夫といひし時、何れも文樂を去りて彦六座へ出座しをり。當時彦六座の顔觸は、住太夫、駒太夫、柳適太夫、源太夫、朝太夫、春子太夫、三味線は團平、新左衛門、

勝七廣作松太郎人形は吉田才治豊松東十郎吉田辰五郎等にして、同座は八月十二日に開場し、文樂は同廿四日初日を出し、其後暫くは兩座互ひに對抗の姿勢を保ちしも、彦六座は遂に文樂座に壓倒せられぬ。越路は團平が去りしにより、此時より今の吉兵衛五代目に改へ、團平の競争者たる廣助は、それまでは彦六座にをりしも、同座へ團平の乗込むとなりたれば、面白からず去つて文樂に入るなど、其事情は今こゝに詳細を盡さずといへども、又以て不穩の一斑を窺ふに足るべし。

其十六 第二の故郷へ錦衣の越路

△文樂大一座の東京乗込△二度目三度目の上京△東京の大人氣

攝津大掾が今日聲曲界に於て、天下第一の大家と仰がるゝを見て、負る嫌ひの東京人は、これ大掾は江戸仕込みなるが故に、今日の盛名を博するに至りきと謂ふやも知れず。こゝに所謂淨瑠璃即ち

義太夫節のみは江戸仕込み當にならずと雖ども、兎に角彼れが修業は江戸に於て半ば仕遂げられしとは事實なり。されば越路は江戸聴て改稱せられたる東京を以て、殆ど第二の故郷と思へるとは人情の然らしむる所にて、彼が最初江戸より大阪へ來りし頃は、大阪の同輩も寧ろ彼れを異分子の如く取扱ひ、彼れも亦多少繼子氣質の僻みを起さざりしにあらず。當時江戸にては何れの席にても彼れ眞となつて名聲噴々たりしもの、一朝大阪へ下りては僅にドンジリたるに過ぎず。血氣の彼れは遠に平なる能はず、忽ち大阪を去つて江戸へ歸らんとしたり。これ恰も懷育ちの少年が、始て他人の飯を食ひ、人生の辛酸を嘗めて、生家へ逃歸らんとするものと同じからずや。されども師春太夫の嚴にして、而も親切なる意見は、誠に道理に適へり。此道理をも師の詞をも無にして去るほどの彼れは、愚者ならねば、一度師の説に服する

や、精進奮勵して、師の訓誡に負かさざらんとを誓ひ、幾多の困難を排し、幾多の競争者を乗越えて、今や決勝點に達し、櫓下の地位を占めて、又彼れに拮抗せんとするもの勿らしめぬ。これ一方よりいへば、近來聲曲界の衰微著しきものありて、名人上手漸く其跡を絶ち、而して之に代るべき新進有爲の輩出せざるに乘じ、多少其時機を僥倖したるや争ふべからずといへども、又こゝに至る決して容易の業にあらず。此時に當り、其盛名を擔ひ、嘗て自分が藝人として頗る甘く育れたる地に來る、宛然錦衣を着て故郷に歸るの概あり。是より先き東京よりは屢々越路の上京を促し來れり。然れども未だ決する所あらざりしが、こゝに彼れをして否、文樂一座をして東京へ行くべき一の機會を與へたり。そは明治十八年の大洪水なり。

御靈文樂にては其後引續き興行し、團平其他一二の太夫を失ひし

に拘らず、越路太夫の人氣は滿都を挑發し、曾て松島に在りたる時よりも一層の繁昌をなしたるが、十八年の六月三十日より七月一日に亘れる近畿の豪雨は、諸川の水を増大したるが中にも、琵琶湖漲溢し、其氾濫の水は淀川に合流し、遂に枚方方面にて堤防數ヶ所を決潰したる結果、河内攝津の大洪水となり、河内は之が爲めに全地方殆ど海と化し、田畑の上を小蒸氣が通ふといふ慘狀を呈し、大阪の浸水も亦甚しかりしが、維新の變亂にも無頓着なりし歌舞伎、淨瑠璃も遠に此時は打撃を受けぬ。恰も文樂座にては「加賀見山」と「伊勢音頭」にて六月廿一日より開場せしも、此出水の爲め七月二日より十二日まで休業し、十三日より更に返り初日を出し、五日間打續けしかど、水害の爲め世間の不景氣は詞に盡されず、殊に暑氣さへ追々と加はりしかば、稀なる不入、兎ても持ち切れずして同十八日に遂に閉場し、さて秋興行までには此景氣が回復するか

と、座主も仕打も座員一同も、思案投首屈托して日を送る折しも、又々頗りと上京を促されしかば、文樂も大いに乗地になり、寧ろ此大阪の不景氣を避けて、東京に一花咲すも面白かるべしと、文樂は一座を率ひて上京するとに決したるが、愈々上京する時は、何れかの劇場を借りて興行する心算にて、最初千歳座を借り同座にて興行せんと其筋へ願出しも、當時の劇場取締規則は餘程窮屈なるものにて、歌舞伎の劇場にて人形芝居を演ずると出来ず、何れの座にても許可とならざるより、大いに困りしも一旦思ひ立たるとなれば、遂に猿若町一丁目猿若座の跡へ文樂座を新築し、同年九月廿一日悉皆落成したれば、其筋の許可を得いよく乗込むとなりぬ。然るにこゝに文樂に取りて思ひもよらざる失敗談あり。そもこゝ此一行は太夫三味線、人形及び衣裳道具下廻りの者までを合すれば、百餘名の大一座にして、此旅費とてなかく少額にあ

らず。殊に此頃は未だ鐵道の便なく、上京するには唯汽船に乗るの外なかりき。然るに當時海上の權を握りたるものは三菱會社にして、是より先き三菱の勢力を殺がんとして、共同運輸會社なる汽船會社興り、大いに三菱と競争を試み、其結果兩社互ひに客の取合ひとなり、乗船賃の如きは非常の低廉にまで割引し、團隊なれば其上にも減額するより、文樂にては豫て共同運輸會社へ申込み、非常の割引を以て、一行百餘名に對し、一人一回づゝの割合にて、神戸より横濱まで乗船せしむるとに約束を結び置し、ところ前の劇場新築一件もしくは此社會に有りうちの纏綿たる事情の爲めに、大いに時日を遷延し、愈々九月廿四日に至り、神戸より乗船せんとしたるに、豫て兩會社の中間に立ち、中裁を試みたるものありて、三菱共同兩會社の合併漸く成り、僅か一日前に其事を發表し、こゝに全く兩社の競争止みたるより、乗船賃金の如き素より普通に復し、

神戸より横濱まで五圓となりしにぞ、仕打は大いに驚き、種々交渉を重ね、此一團だけは是非に約束通り、低減せられたしと談判に及びたるも、大會社のととて一旦發表したる以上、少しの情實をも許さず、殊に賃金の割引の如きは、双方の協定上最も重き問題なれば、遂に聞入れられず、文樂は之が爲め乗船賃に百餘圓支拂ふべき所へ、五百餘圓を要し、みすく、四百圓を餘計に支出したるは、意外の損失なりしなり。されど是は文樂の懐合の話なり。越路はじめ一行百餘名は、山城丸に乘込みて九月廿四日神戸を解纜し、同廿六日横濱に着し、廿七日東京に入りぬ。新橋より一同の者は、鐵道馬車十五臺を買切り、之に迎ひの者二百名、都て三百餘名を分乘して、花々しく猿若町の新築文樂座へ乘込みたり。さて此時の狂言は、前が『朝顔話』中がお目見御祝儀として『壽三番叟』に『先代萩切』が『矢口渡』にて重なる役割は、住大夫の「島田宿」三番叟は越路住、津長

尾路等が勤め、人形は三番叟が玉造と玉助翁が紋十郎、千歳が玉治、先代萩切では竹の間が津太夫、御殿が越路太夫、頓兵衛住家は呂太夫が語り、三味線は廣助吉兵衛、外敷名なりき。開場は十月四日、待ちに待ちたる事として、日々の大入なりしも、東京人は人形芝居を見馴れざるに、一方には團菊の如き名優ありて、歌舞伎芝居の繁昌しをる時なれば、大阪人ほど人形芝居に重きを措かざれば、早く切上げ目先きを變るの必要あり。それらの寸法より割出して、聴て二の替りを出したるが、狂言は前が『白石噺』中が『中將姫』次が『歌祭文』に切が『吃又平』にて、役割は住大夫の「新吉原揚屋」、越路の「雪責」、津太夫の「野崎村」、呂太夫の「將監館」にて、「琴責」の掛合は重忠は住、岩永は呂、阿古屋は織、太夫等なりき。三の替りは狂言『二十四孝』、『合邦辻』、『躰仇討』、『兜軍記』にして、是れ文樂のお名残り狂言なり。以上三興行にて都合日數五十日間、非常の大入なりし

も、最初汽船賃の喰違ひあり、殊に文樂の爲めに、いかに粗末なる  
 小家なりとするも、新たに建築せしとなれば、今回の上京は費用負  
 けして、なかく儲かる所の騒ぎにあらず。文樂座としては大失  
 敗に終りしが、此興行にて越路太夫の名聲は満都に鳴渡り、我も我  
 もと出席を促し、文樂一座は十二月の上旬歸阪したるも、越路は路  
 南部、春榮、越代太夫等を随へて東京に止り、各寄席へ出勤したり。  
 其重なる席を舉ぐれば、十二月九日より宮本亭十日間、十九日より  
 伊勢本十日間、明けて十九年一月一日より若竹十日間、十一日より  
 東橋十日間、廿一日より新柳亭十日間、二月三日より更に宮松に於  
 て、越路が御禮お名残として三日間勤め、其上り高を以て養育院へ  
 五十圓、福田會育兒院へ二十圓、又龜戸天満宮へ金屏風一双と金十  
 圓、茅場町日枝神社同天満宮へ金十圓宛を寄附し、十九年の二月六  
 日東京出發、此行前述るが如く文樂に取りては餘り香しからざり

しも越路は名實共に合せ收め、いたく帝都に面目を施して歸阪せ  
 り。  
 さて越路は大阪に歸り、三月興行より文樂座へ出勤したるが、御靈  
 社内に建築したる小家は、元來狹隘なり。殊に此頃は人形淨瑠璃  
 のいたく流行し、又新たに越路が天下の人氣を脊負ひて歸りしと  
 なれば、到底こゝに容るゝ能はず。彼れが不在中は御靈にて興行  
 せしも、三月の時より再び松島の小家を使用せり。即ち松島にて  
 は三月、五月と打ち同夏は流行病の爲めに長く休業し、同十一月と  
 都合三回の興行をなし、御靈文樂座の改築に取掛りしを以て、同年  
 押詰りて再び上京し、二十年一月二日より前お馴染の宮松、東橋、伊  
 勢本、若竹、玉の井、鶴仙、琴平、亭及び横濱の萬竹等へ出勤したるが、三  
 月上旬より耳を煩ひて佐藤病院へ入院し、凡そ一ヶ月程休業し、暑  
 中には日光及び磯部温泉に遊び、足利町にて七日間興行し、九月二

十日に歸京し、猿若町文樂座にて五日間慈善興行を催ふし、金五百圓を養育院に寄附したり。此興行殊に好人氣にて日々客止の大入を續けたりといふ。而して越路は更に二十三年の三月より三度目の上京を試みたりしが、能く其藝品を認められて評判いよいよ高く、年内殆ど東京に在りて、前後二百十日間各寄席に出勤して聲價益々高きを加へたり。同年十二月廿八日出發し、名古屋を経て大阪に歸り、爾來今日に至るまで上京せず。

其十七 淨瑠璃の上の活歴風の流行

△團十郎が活歴の影響如何△心ある人の忠告△越路の熱心

活歴といへる新熟語は、假名垣魯文が市川團十郎の史劇に與へたる所なるが、今假りに演劇の上にも歴史の事實穿鑿をなすを以て活歴と號るとを得ば、淨瑠璃の上にも亦活歴風、即ち事實調の大いに流行したる時あり。或は之を以て團十郎が演劇の影響なりとせ

んか、それは餘りに早く淨瑠璃の上に活歴風の表出されたるを見る。活歴といふ熟語は團十郎の史劇に冠せられたるものとするも、同じ歴史の事實穿鑿は、淨瑠璃の方にも明治五六年より採用せられたるを見れば、所謂活歴風なるものは、當時一般に演藝界を襲ひたる新潮流なるが如し。そもく徳川時代にありては、幕府を憚るの主旨より、凡て當代の武家に關する事件は、之を戯作もしくは興行物の上に發表するとを許さざりき。然れども何時の世にも法律を潜るの手段はあり、されば當代の事件を戯作殊に淨瑠璃もしくは歌舞伎に脚色したる類例乏しからず。すなはち其事實を採り、單に時代を鎌倉もしくはは足利に假り、人名等を變じておぼるげに其事件を表出するは、強ちに出來ざる事にあらざりき。例へば『鎌倉三代記』の如き、『近江源氏先陣館』の如き、何れも大阪陣の事を鎌倉時代の事に擬へて作り、又『假名手本忠臣蔵』の如きは足



利時代に假りたるのみならず、人名の如きも悉く變じ、眞田を佐々木、徳川を北條、木村を三浦としたるが如きは、著名なる例にして、『繪本太功記』は太閤を利せ、『祇園祭禮信仰記』は信長を利せ、人物の名をも織田信長を小田春長、羽柴秀吉を眞柴久吉などの類擧ぐるに違あらず。此假設的事實は歴史を知らぬ、無智蒙昧の徒には淨瑠璃歌舞伎の本文通りを眞の事實として會得せられたるも、少しく學問ある社會には實にをかしく感ぜられたれども、幕府壓制の結果なれば如何ともすべからず、之も一の方便として看過されたれど、幕府倒れて明治政府代り從來の舊慣を一新すると同時に、出版興行上に於る窮屈なる禁制も解け、最早時代を憚り人名を變ずるが如き必要なくなりたれば、今迄をかしと思はれたる歴史と演劇の上の矛盾を訂正せんと試みたるは、道理なきとにあらず。是等の意見が導火線となりて、所謂活歴風の流行を見るに至りしもの

なれど、此風潮は維新後直ちに劇界に現出したるにはあらず。東京にては活歴の本尊たる團十郎すら明治四年八月『出來穠月花雪張』と題し「九度山の眞田」を演じたる時、なほ幸村に佐々木高綱の假名を用ひたり。されど同六年に至りては、時代人名を變更するとは全く止み、五月に『浪花眞田軍記』を出して、片桐且元、眞田幸村、成瀬隼人、徳川家康等歴史上其儘の人名を發表し、續いて『いろは實記』に大石内藏之助、『竹中間答』に木下藤吉、同八年『慶安太平記』に由井正雪、同十年に『水戸黃門記』を出し、同十一年に『千代田神徳』を出して、團十郎は家康、義元、築山御前等に扮したるが、此脚本を新作するに就ては、初めて學者の説を參酌し、團十郎は古實家を顧問として、衣装道具等をほゞ時代に適ふ如く拵へさせたるなど、此時に至り活歴熱は漸く其度を増せり。即ち團十郎の活歴なる者は、從來歌舞伎にて徳川氏の事を出せば、時代人名を假設したるを、事

實有の儘に訂正したるに止まらず、更に進んで衣裳道具にも有職古實を正し、家康に扮すれば其心持より身振態度服裝に至るまで悉く家康其人を舞臺に再現するの想ひあらしむるまでになし遂げたり。されど其他にては素より有職古實を調ふる物數奇もななく、よし有りたればとて我人共に許さず、況んや淨瑠璃は唯語り物たるに於てをや。もし實行すれば人形の上なれども、是とて既に其物が人形なれば、一部の事實穿鑿をなしたればとて、到底之を眞の歴史上の人物の如く思はしむると難ければ、茲に訂正を加へんとするものゝあるべき筈なけれど、前いふ通り、幸村を高綱となし、家康を義時となすが如きは、何となく紙を隔て、物を見るの想ひあり。ましてや今迄法度なりし、徳川時代の事を歌舞伎淨瑠璃に登すも苦からざる世となりしより、俄に好事を挑發して、先づ豫て矛盾と思ひゐたる、時代人名の假面を除却し、それと同時に大い

に徳川時代初期の事實を舞臺に登せんとするの風潮は、東京も大阪も殆ど同一時に襲來せるものゝ如し。今文樂座に就て此變化の風潮を調べ見るに、『先代萩』は明治二年頃より既に多少人名を事實に近けるも、『太功記』『三代記』『信仰記』『忠臣藏』に至りては、未だ少しも改作の手を着けず。然るに明治五年六月の『太功記』及び同十月の『出世太平記』等には、小田を織田とし、武智を明智、眞柴を羽柴と改めたるに拘らず、久吉は久吉、春長は春長となほ依然舊名の假裝を襲用したるものありて、事實の穿鑿は此時既に喧しき問題となりしとはいへ、追に今日まで襲用し來りし舊作を全然改むるほどの勇氣はなく、僅に一部に手を入れや、逡巡したるの事情を察すべし。而して此新舊潮流の撞着は數月にして解決せられ、遂に新潮流の勝利に歸し、翌年六月の『鎌倉三代記』には、全く其面目を一新して現はれたり。即ち『三代

記』には鎌食の二字を削り、

大元帥は眞田左衛門尉奇術の軍配

名將は徳川老

君智仁の陣取

三代記

藤大將は後藤又兵衛英勇の鋒先

と外題を置き、舊淨瑠璃の陣屋は茶白山陣所に和田兵衛屋敷は後藤又兵衛屋敷に摺針太郎住家は長曾我部住家に三浦別れは木村母閑居と改め人名は島津の大樹、木村重成、徳川老君眞田幸村、内大臣秀頼、淀君など悉く實名を用ひて床本に大改正を施し、同八月は文樂座が京都の都万太夫座へ乗込み興行し、出し物は六月のと同じ淨瑠璃なれども、三代記にてはなほ喰足らぬ所ありしか、全く外題を『實傳大阪夏陣記』と變じたるなど、いかに當時此事實穿鑿の流行せしかを見るべし。

而して此新流行は從來の淨瑠璃中時代人名を假設したる物には、悉く改正を加へて止まざるもの、如く他の時代物には目も觸れず、同九月には『忠臣蔵』を出して吉良上野介義英、淺野内匠頭長矩と角書し、大星由良介を大石内藏之助、早野勘平を萱野三平、寺岡平右衛門を寺阪吉右衛門、足利直義を中納言綱教など改めたるかと思へば、伴内定九郎等は其儘にして、場割の如きは大序は鶴ヶ岡と、從然の通りにして、扇ヶ谷を霞ヶ關、桃井屋敷を龜井能登守やしきとしたるなど、改作の上に一定の方針なき節あり。更に翌年の四月には『八陣守護城』を出して、是又改正を加へたるが、當時一方には改作の不可を唱ふるものも少なからず、それは座員のみならず、心ある聴衆は此没趣味の改作に眉を擧め、反對の聲高かりしにより、此改作ものを續出したる明治六年を過ぐれば、又却て普通の時代物に復り暫く其殺風景なる鋒先を避けたるやの概あり。

然れども文樂の改作熱は、之が爲めに冷却したるにはあらず、同年三月の『太功記』、九年一月の『信仰記』は『信長記』として同年七月には『豊臣太平記』、十年三月には『八陣』を出して、相も變らず事實に穿鑿に憂身を糞しをりしは、必竟同座には文樂翁の如き文者あり、又客筋には多少學者もありて、素より履違へなれども、歴史と淨瑠璃との事實を一致せしめんとの考へより、此流行を來し、東京には殆ど相前後して、團十郎の活歴流行したるなど、一時の潮流とはいへ無論新思想の劇に及ぼしたる影響たるには相違なし。而して當時文樂座以外には、如何なる態度を取りしかといふに、道頓堀竹田其他の芝居にて、興行しゐたる竹本山四郎(山城掾)一座は、山四郎をはじめ巴太夫、古勒太夫、織太夫、濱太夫など名人また少からず、三味線には清六、友次郎、新左衛門、人形には吉田喜十郎、辰造、東十郎などありて、人形淨瑠璃一方の勢力なりしが、此方にては『先代

萩』のみには多少實名を用ひたれど、文樂座にてなしたる如く、『太功記』、『三代記』、『忠臣藏』其他には、改正を施したる跡を見ず、實に此改作は文樂座ひとり實行したるものといふべし。さて此間越路はいかなる役割を勤めしかといふに、素より未だ勢力のなき時なれば、自分の意志の行はれたりとも思はざれど、明治五年十一月『出世太平記』の時には、附物の『戀飛脚』に『新町の段』を語り、同六年『先代萩』に『御殿』、『三代記』には、『奥御殿』、『京都の大阪夏陣記』の時には別に『中將姫』の『雪責』を語るなど、此改作の主動者にはあざりしとを知るべし。そは兎に角、文樂座に於ては此活歴風は其後久しく持續し、前に列したる如き外題には、皆人名を事實に分して語り來りたる所名のみ實名を用ふるも、文句まで改削する文者もなく、茲に更に矛盾を來したるが一方には、『忠臣藏』は大石内藏之助にては客受け宜しからず、やはり大星由良之介の方を悦ぶより、事實穿

百二十六  
 鑿熱も漸く下火となり、明治十八九年頃には、殆ど舊に復し、眞田幸村は佐々木高綱に、原田甲斐は仁木弾正として語りたり、されど此頃には既に一方の活歴風も多少俗耳に入りをれば、太夫の好事にては之を語るもありき。折しも明治二十四年の十一月のとなりき、文樂座にて越路は久しぶりに『太功記』千を語りしが、此頃は彼れが「尼ヶ崎」の三度目にして、越路の全盛時代なれば、評判素より悪しからざりしも、之を語るには、従來のものを取らずして、改正の床本を用ひぬ、當時は既に改作に耳の馴れたる時なれば、別に咎むるものもなかりしかど、當時「大阪毎日新聞」に在りて、政治文學を兼ねたる記者木内愛溪氏は、一日越路の淨瑠璃を聞き、床本改正の前々より行はれたるには心付かざりしも、兎に角人名を改め語るの没趣味にして、而も淨瑠璃の文句に大なる撞着矛盾を來すとの不可なるを慨歎し、十一月廿一日の紙上に「越路太夫の太功記十日目」

と題して、改正の不都合なるを諷したり。其文に曰く。  
 一夕越路太夫の太功記十日目を文樂座に聞く、いつもながら美聲行雲をとゞめ、梁塵を動すの妙感伏の外なし、唯茲に注意致したきは、淨瑠璃の文句中眞柴久吉、小田春長、武智光秀などあるを、羽柴秀吉、織田信長、明智光秀等と改められたる事なり、是は改めぬが善し、原の儘なるがよし、改良とか何とかいふ積りかは知らねど、歴史は歴史、狂言は狂言、違ふてをればとて何の差支あるべき、若し斯る事を改め立するならば、忠臣藏などは如何すべき、鹽谷判官は淺野内匠頭とし、師直を吉良上野之介とせねばなるまじ、若し然する時は名文と知られたる佳肴ありと雖も、食せざれば其味を知らずとは國治りて善き武士の忠も、武勇も、隠るゝに譬へば星の晝見え、夜は亂れて見はるゝ云々の序詞なども空となるべし、又「太功記」とても、其通り茲に苜取る眞柴垣云々の文

句の如き、頗る味を持たる詞なるに、眞柴久吉を羽柴秀吉に改めて仕舞ふては、是等の文句も何の甘味も無くなるなり、古人の作には漫りに手を入れぬこそ善けれ、それを改めしは越路にも似合ぬ事なり。

越路は翌日此新聞を見て、其道理あるに服し、其日より改正の床本を擲つて、淨瑠璃の本文にある如く眞柴久吉、小田春長、武智光秀にして語りしかば、人皆過を改むるに吝ならず、藝道に熱心なるを稱へたり。木内愛溪氏も深く、越路の心掛のよきに感じ、同廿三日の紙上に左の文を掲げたり。

越路太夫の藝道に熱心なるは、今更いふまでも無き所なるが、今度文樂座にて、太功記十日目を演せしに、羽柴秀吉、明智光秀など姓名をば處々改作なせしに付き、改作の不可なるを忠告したるに、越路は一も二もなく之を首肯し、再び原作の儘にて演する

ととなし、厚く注意の程を謝し來れり、且此改作は越路が爲せしにあらず、去る十六年中、重太夫が此淨瑠璃を演せし時、改作せしものにて、今度又之を演するに方り、越路は飽くまで原作の儘にて演ぜんといひしを、他の人々が頻りと勧めしかば、さらばとて重太夫の改作せしものを語りたるが、一たび忠告を受くるや、それだからいはぬとかと曩に勧めし人々を叱り付け、淨瑠璃の文句を原作通りに直すと同時に、番附等まで悉皆刷直させ、改めて諸君のお聞に達するの事なるが、高がコレシキの事を何もなど思ふ人もあるべけれど、小事なりとて捨置ざる其心掛け實に殊勝の至りなり、一世の名人ともいはるゝ者は、斯う無うてはならぬ事なり。

重太夫の床本とは受取れず、ヤハリ十六年に越路が當時の流行に依りて語りたる床本を用ひたるなるべし。そは兎も角、越路は既

に改正本の不可なるを認めをりしとは事實にて、そこへ有益なる學者の忠告を受けたれば、越路は翻然として其翌日より在來のものに改めたるなるべし。語るものも聞くものも既に改作の不可を認めをりし所へ、此忠言ありしかば、之が動機となりて再び改作の淨瑠璃を語るとは全く止り、再び此没趣味の淨瑠璃を聞くとなきに至れり。是れ一時の潮流に促されたるなれど、歌舞伎殊に團十郎の事實穿鑿は必ずしも、歴史の皮想をのみ寫したるにあらざれば、多少成効したれども、其他の者殊に語るのみなる淨瑠璃に至りては事實の穿鑿は何の役にも立たず、徒らに角を矯めて牛を殺すの譏を免れざりしも、こゝに至りて此流風の止りしは寧ろ慶ぶべきとなりかし。

其十八 越路の競争者豊竹古鞞太夫

△文樂暗に兩人を競争せしむ、△古鞞の退座並に彼れの横死

越路が出世盛りの時には、同一座中に随分鎗を削りたるものあり、其中にも最も強大なる競争者は豊竹古鞞太夫なりき。古鞞は年齢も越路よりは九歳長じゐるのみならず、彼れは實生の藝人にて、小兒の時分より豆太夫にて出て、初代鞞太夫の門弟となりて、鞞小太夫と名乗りしものなり。師匠に随ひ久しく東京にて修業しゐたりしが、師の鞞太夫が東京にて歿せしかば、明治三年久方振りに大阪へ歸り、同年七月より稻荷文樂座へ出勤したり。太夫としての出身の越路よりも古きのみならず、彼れも亦なかゝの有望者にて、當時最も脂の上り盛りなりしかば、地位はいふまでもなく、越路の上に置れたり。其時の狂言は「忠臣蔵」と「伊勢音頭」なりしが、越路は前の「勘平住家」の中を語り、古鞞は切の「福岡貢屋敷」を語りぬ。地位は違へども、一方越路は今や駿々として藝の進む盛りなり。二人ながら當時の花方役者、人氣に於ては越路むしろ彼れの上に

あり。人氣と地位とを以て藝の上の競争は彼等二人の間に行はれたりといふよりも、文樂彼れ自身の政畧として、二人を競争せしめたり。例へば同年十一月に「加賀見山」を出し七つ目に越路をお初として、古靱に尾上を勤めさせたる如き、同四年正月の「信仰記」に古靱の役が「基立」なれば、越路の役は「爪先鼠」なるが如き、「兜軍記」同四月の「琴責」に越路が重忠を勤むれば、古靱は岩永を勤むるが如き、暗に二人の間は重忠と岩永とのみならず、又人格に於ても二人は多少重忠と岩永とに似たる所ありて、兩者互ひに轡を並べ進ませしと殆ど三年なりしが、此古靱には喘息の持病ありて、音聲を使ふものには殊に防害を與へしかば、時々缺勤するとあり、又越路は着實にして、彼れは豪放、勉強に於ては越路遙に彼れの上であり、されば地位は兎も角こゝ二三年に於る越路の進歩は著しきものありて、其人氣は益々加はり、實力又決して古靱の下にあらざりし

かば、文樂座の待遇は遙に彼れに勝り、遂に彼れ不平を惹起し、同年の四月「染分手綱」の子別れを語りし限り、古靱は文樂を退座して、其後は道頓堀竹田芝居をはじめ諸所へ出勤したるが、明治十年二月御靈社内表門の小家に自分座頭として、人形浄瑠璃を興行し、「信仰記」に「花子の段」と「爪先鼠」を語り、翌十一年二月「大内鑑」に「狐別の段」を語りしが、千秋樂の夜樂屋にて大工棟梁某同座の道具方の爲めに暗殺され、不慮の横死を遂げたるこそ、敵と味方とに拘らず、實に氣の毒の至りなれ。事の原因は今之を詳にせざれども、一説には古靱太夫は自分座頭なるの故を以て、銀方に忠義立をなさんと、して、下廻りの者を虐使し、殊に道具方を苛めたるより、遺恨を買ひたりといふ。時に享年五十二歳なりき。此外には同一座ならざりしも、竹本綱太夫の如き、若し天の壽を與ふるとなほ數年ならんには、浄瑠璃界の人氣を二分したるやもしれず。竹本重太夫は素



より越路よりも先輩なりしが地位は伯仲の間にありて、久しく斯界に驅逐したるものなれど、後には遂に彼れを乗越し、重太夫は聽て文樂座を退きぬ。今の竹本彌太夫は競争者ならざりしも、又當代の名人にて、越路と同座すると最も久しかりしが、彦六座經營の爲めに彼れも亦文樂を去りしかば、後には殆ど異分子を文樂に留めざりき。其座員は越路の部下にあらざれば、少くとも外様大名として越路の味方なるものなりき。實に文樂座は越路内閣となりしなり。即ち其顔振は山城掾の系統を受けたる竹本津太夫、古靱太夫の門弟なる豊竹呂太夫、竹本染太夫等と越路直轄の門弟、文字太夫、むら太夫、南部太夫、七五三太夫、源太夫など、越路一味の者を以て、座員を組織するに至りぬ。

其十九 生涯の光榮ある部分

△故小松宮殿下の令聞に達す△高野山の忠魂碑建設△竹本攝津大掾

の名を賜ふ△七十五日間の大興行

越路の生涯中最も光榮ある部分はいへば、彼れが故小松宮殿下の寵遇を辱うし、しばし其藝を令聞に達し、遂に殿下より攝津大掾といふ大なる名を賜はりしとなり。抑も越路が小松宮殿下の御前に始めて伺候したるは、明治二十三年の十一月二十七日のとなりき。當時越路は恰も三度目の東京興行に上京せし時なりしが、此日高繩なる後藤伯の邸に於て、其頃は象次郎老伯の未だ存命せられし時なるが、小松宮殿下には折しも同邸へお成あり、主人の伯爵は御慰みとして餘興に上京中なる越路を招きて、彼れが妙音の一段を御聞に達したり。其時越路は路太夫と同伴して推參し、御前に於て路太夫は「葦源氏」の伏見の里を、越路は「二十四孝」の「謙信館」を語りぬ。殿下には豫て聲曲の御嗜好あり、越路が天性の美音にはあまた、ひ御感遊ばされ、御機

百三十六  
嫌いと麗しく、其至藝を御賞美ありて、此時より越路をお最負に遊ばされたりと。其後もしばしば御前に伺候してお聞に達したる  
とありしが、近くは三十四年即ち一昨年の五月十九日、越路太夫は  
むら太夫、文字太夫、今の越路等を従へて高野山へ登りぬ。これ越  
路が豫て日清戦役の時、國家の爲めに忠死したる兵士の冥福を祈  
らんとして、高野山に忠魂碑を建つるの計畫ありて、其碑には小松  
宮殿下の御揮毫を願ひ即ち、

明治廿七八年攻清之役  
明治三十三年北清事變

戦死者忠魂碑

元帥陸軍大將大勳位功二級彰仁親王書御判

と遊ばされたるより、花崗石にて建設し、落成を告げられたれば、建碑供  
養の爲めに登山せしものにて、宮殿下にも折ふし御登山遊ばされ、  
右の御縁故より、拜謁仰付られ、寶物縦覽のお供を仰付られ、二十一

日は午前に奥の院へ御参拜の序を以て、忠魂碑へ御焼香なし下され、  
越路より御禮申上し時、大層立派に出来たと御褒めの詞を賜り、  
越路は身の面目之に過ぎじと常に人に語りて悦びあへり。午後  
二時より金堂に於て、忠魂碑の大法會を行ひたる時之へも殿下は  
御臨場遊ばされ、二十二日御下山相成りたれば、越路等も同日御跡  
より歸阪したり。

依て越路は同二十四日、殿下が京都の御旅館なる川田氏別荘へ御  
禮として伺候したるに、折ふし御催しありて、村雲尼公、東本願寺法  
主、高崎京都府知事、内貴同市長及び大阪よりは田村市長、藤田傳三  
郎氏等を御招きあり、餘興として文字太夫の「萱萱」高野山の段と  
越路の「忠臣藏」山科の段を御意に入れぬ。同年十二月十三日、赤  
十字社大阪支部大會の節、殿下には總裁の御資格にて御來阪平の  
町堺卯樓に御投宿遊ばされし時も、拜謁仰付られ、越路は御慰みと

して『菅原』の「松王實驗」を語り御前に達したり。三十五年九月九日、越路は須磨の別荘に避暑中の折しも、京都河原町田中市兵衛氏の別荘より使を以て越路に來京を促せり。越路は此時吉兵衛上京して三味線なきを以て一旦辭退したるも、再度の使ひに黙止がたく同別荘へ赴きたるに、小松宮伏見宮兩殿下お成りあり、村雲尼公も來られ、餘興として津太夫の『忠臣藏』山科の段、越路は御所望により『二十四孝』の「謙信館」を令聞に達したるが、三味線は津太夫の猿糸にて勤めたりき。同日越路夫婦、文樂座の支配人渡邊幸次郎の三人御旅館なる川田氏別荘へ伺候し、一同拜謁仰付られしが、此時竹本攝津大掾たるべき令旨を承りぬ。されど當時殿下には其用意あらせられず、依て假書を下し賜りぬ。十月三十一日同じ御旅館に御滞在の折節、殿下及妃殿下の御前にて、越路は文字と共に推參し、文字は「染分手

綱』を越路は『河原達引』を語りてお聽に達したり。此時攝津大掾たるべき御令旨の本紙と烏帽子及び素袍一着を賜りぬ。其御令旨の本紙は左の如し。

二見金助事

淨瑠璃藝名 越路太夫

夙に斯藝に熱心にして堪能の聞あるを以て御前に召させられ御聽聞の處深く御感賞あらせられ、仍ては御室御所の古例も有之、自今攝津大掾と稱す可き旨御沙汰候事

明治三十五年九月十日

小松宮家扶

二見金助とは越路の本名なり、仰も此受領なるとは昔より斯道にては大切の事にて、今淨瑠璃史を案ずるに山本土佐掾、宇治加賀掾の如き他流は、姑く措き、竹本義太夫の師井上播磨掾以來、義太夫節

の正統を受けたるものにして、此受領あるは攝津大掾まで實に十  
 年に過ぎず。即ち井上播磨掾は最初寛文二年大和掾を受領し、同  
 十年更に播磨掾に轉任せり。其門弟清水理太夫即ち竹本義太夫  
 は元祿十四年筑後掾と受領せり。筑後門人にして後東流の一派  
 を興したる豊竹若太夫は享保三年上野少掾を受領し、同十六年禁  
 廷に召されて孫庇の下にて淨瑠璃を語り、中御門院の叡聞に達し、  
 勅許ありて更に越前少掾を受領あるとは世の洽く知る所なり。  
 而して二代目義太夫は元文中播磨掾竹本内匠太夫は延享中上野  
 少掾を受け、後更に大和掾となる。竹本紋太夫は寛保中上總掾を  
 受け、又竹本美濃太夫初め豊竹伊太夫も同年中豊竹越前少掾の勅  
 許あり。竹本土佐太夫は文化年中播磨大掾を、五代目竹本染太夫  
 は嘉永元年越前大掾を、又同六年頃京都の山本壽三郎事竹本壽太  
 夫(後津賀太夫)は山城掾を受領せしが、維新後此官位國號を稱ふる

とを禁ぜられしかば、此人同訓を以て竹本山四郎と呼びきといふ。  
 以上列擧したるもの實に九名にして、今越路を加ふれば實に十名  
 なり。其内にも大掾と稱したるは土佐太夫の播磨大掾と染太夫  
 の越前大掾と越路とあるのみ。何はともあれ、越路の身に取  
 りては光榮といふべく、又斯道の名譽といふべし。されど越路太夫は  
 師匠竹本春太夫の遺言により、六代目春太夫の名跡を襲の素志な  
 りしかば、先づ此素志を果すべしと、明治三十六年一月自分は春太  
 夫と改名し、それと同時に門弟文字太夫をして三代目越路太夫の  
 名を襲がしめたり。彼れが最初南部太夫にて現はれ、未だ幾許な  
 らず、文久三年二代目越路太夫の名を襲ぎし以來、こゝに明治三十  
 六年まで四十一年、名聲四方に響き、少しく聲曲に心あるものなれ  
 ば、縦し彼れが淨瑠璃の一段を聞かざるも、斯界の名人に越路ある  
 とを知らざるもの殆ど稀なり。而して初代越路の名は餘り聞え

たる名にあらず、唯彼れは修業時代師父として仕へたる、三代目吉兵衛が實父の藝名なりしを以て、吉兵衛の恩に感ずる餘り、其名を襲ひ、此名を今日まで改めずして持續したるのみならず、左までもなき名を斯くまで大名としたるは聊か師の恩遇に酬ゆるところあり。さて春大夫改名の口上は、

口上

市内御客様方愈々以て御機嫌能被遊御座奉恭賀候降て私事追々老境いつ迄も御蟲負の餘光に浴し候はんは實以て恐縮に不堪候得共先師之遺言難默止義も御座候間今般師名相續仕今一度流派の曲節を研磨致し度心願に付意中御推察の上一層御蟲負御引立の程奉希上候且又三代目越路太夫名跡の義門人文字太夫に繼せ候間是又同様行末永々御蟲負御引立の程偏に御願奉申上候口上依て如件

越路太夫改

六代目 竹本春太夫

月 日

此時の狂言は前が「八犬傳」大序より「芳流閣」まで、中が御祝儀として「花競四季壽」といふ所作事に「戀飛脚」切が「加賀見山」長局より奥庭までなりしが、口上は「八犬傳」の次に越路改め春太夫が文字改め越路太夫を従へて舞臺に現はれ自ら之れを述べぬ。さて役割の重なるものを擧ぐれば、「富山の段染太夫(糸廣作)」「行女塚源子、叶太夫、伴作住家」の中が文太夫(糸大三郎)切が呂太夫(糸勝鳳)「丸塚山」南部太夫(糸寛治郎)「八木城中」の中が七五三太夫、切が津太夫(糸猿糸)新口村の中がむら太夫、切が春太夫(糸吉兵衛)長局の段越路太夫(糸吉彌)又「四季の壽」はシテ春太夫、ワキ越路、ツレ南部、越喜(糸吉兵衛)吉彌、寛治郎、勝三郎にて人形は玉造の奴隸介孫右衛門、万歳岩藤、横堀有村、紋十郎の浦菊、梅川海士、小町鷺娘、玉助の伏姫、信乃

忠兵衛万歳おはつ。多爲藏の伴作道節道庵尾上。榮三の義實龜  
 笹敷妙等なり。此興行三十六年一月二日より始めぬ。時節も好  
 かりしかど春太夫の改名はいふまでもなし越路も亦當時の人氣  
 ものなれば非常の大入なりしに二月十八日小松宮殿下薨去遊ば  
 され同日より三日間鳴物停止となれり。さなくとも春太夫が厚  
 き恩寵を蒙りし殿下の御事なれば彼れは深く哀悼の意を表し奉  
 り遂に之れにて千秋樂になしぬ。此興行實に四十七日間若し此  
 事なかりせば人氣は如何しても六十日以上持續すべかりしなり。  
 春太夫はこれにて師匠の名跡を一旦は襲ぎたるもこれ實は其遺  
 言を空しうせざるにありて新たなる望みは小松宮殿下の賜を拜  
 するにあり。殊に今や殿下の御他界遊ばされたるに其心はます  
 く切なるものあり。依りて三月興行『廿四孝』と『河原の達引』  
 を終りし後直ちに其準備に取掛りいよく竹本攝津大掾と受領

するとなれり。

五月一日より御靈文樂座の狂言は『妹脊山』大序より四段目まで  
 と『壺坂靈驗記』にて重なる役割は、蝦夷館の切りがむら太夫、二の  
 切奥山の段が染太夫、花渡しが文太太、山の段の掛合は後室定高  
 春太夫改攝津大掾、雛鳥は越路、大判事津太夫、久我之助は染太夫、杉  
 酒屋越路、鱧七上使津太夫、姫戻りが南部、御殿の段攝津大掾、又切  
 の『壺坂』は此れより先き文樂に入りし竹本大隅太夫の出し物に  
 て、土佐町松原は文太夫、澤市住家を大隅(系叶)が語りぬ。三味線は  
 ほゞ前の通りなればいはず、人形は豆腐の御用、澤市、大判事が玉造。  
 定高、お三輪が紋十郎。芝六、雛鳥、鱧七、お里が玉助。おきじ、久我之  
 介、橘姫が助太郎等なりき。  
 さて攝津大掾の披露は山の段掛合の前に於て行はれぬ。今舞臺  
 の飾附は正面に紫縮緬花菱の一ツ紋天幕を張り其下は青御簾四

枚を垂れ、御簾縁は織物本金にて花菱の散し、膝隠しは上下とも木綿白淺黄二巾に眞中に紋一ツ、舞臺の後は金屏風二双にて圍ひ、青御簾を一時にきりくと巻揚ぐれば、攝津大掾は故小松宮殿下より拜領したる烏帽子素袍を着用して中央に坐り、右の傍らに大隅大夫是より少し下りて十人の門弟、攝津大掾の左方に並びたるは越路、むら、南部、豊、越可の五人。右方に並びたるは七五三、高尾、叶、源、子、越喜の五人なりき。一步前に坐りたる攝津の大掾をはじめ大隅大夫外一同、御簾の巻上るや、観客に向つて一禮し、大隅は攝津大掾に代りて聲朗に口上を演上げたり。

私儀

曩に小松宮殿下より攝津大掾と改名可致旨御台命を蒙り候得ども先師の遺命に依り一と先春大夫と改名致し候はては先師へ對する情誼不相立候様申上候所最もに思召被下然らば春太

夫、襲名の上機を見て改名可致様御沙汰を蒙り候に付此度殿下より拜領の攝津大掾と改名仕候所に御座候殿下御在世中右の披露致し候らはざりしは誠に残念至極に奉存候へ共致し方無之此上は拜領の御名を穢さざらん事を念々相期し候外無之私胸裡御懺察の上乍此上御最負被爲下候様奉冀上候且此度門弟大隅大夫事久し振りにて入座出勤仕候間私同様御最負御引立の程併せて奉冀上候以上

竹本攝津大掾謹白

時恰も第五回勸業博覽會の開期中なりしかば、東京をはじめ各地方殊に九州四國など曾て越路の名を知れる人々は此光榮ある彼れが改名披露を一見せんと入場したりしかば、道頓堀其他一切の興行物は博覽會開期中非常の不景氣なりしにも拘らず獨り此文樂座は竹本攝津大掾といふ名に呼ばれて、初日以来の好景氣、凡そ

四五十日間は日々大入を掲げ、少しく場を撰むものは、二三日以前より申込むにあらざれば、見物すると能はざりし程にて、遂に五月一日より七月十五日まで、日數七十五日間興行したり。彼れが生涯中空前の盛況なり。否、獨り彼れの生涯のみにはあらず、過し昔し近松門左衛門が『國姓爺合戦』を書卸したる時、十七ヶ月三ヶ年に亘りきといふ古今未曾有の大興行時代は、姑く措き、淨瑠璃の流行漸く衰微の運に傾ける最近百年の間には、恐らく此攝津大掾披露の興行ほど全盛を極めたる興行は他になかりしなるべし。

其二十 最近の興行

△最近三年間の興行概況△五代目吉兵衛△大掾と文樂座の關係

今最近三年間明治三十三年十一月より三十六年十一月興行までの彼れの語り物座員の重なる顔觸れ及び文樂の景況一斑を示さんに、三十三年十一月興行は前が『太功記』に中が『合邦辻』切が『明

鳥』にて、染太夫の清水長右衛門切腹、呂太夫の杉の森津太夫の『尼ヶ崎越路』の合邦住家に文字の山名家等にて興行日數四十一日間なり。

三十四年一月は一日初日にて『菅原』の通し、津の相丞名殘に呂の櫻丸切腹、越路の松王首實驗、文字の東天紅と配所の二段、染の天拜山にて日數が四十七日間大入なりき。次は三月一日初日にて『忠臣藏』の通し、文字の殿中津の判官切腹と由良之介、呂の勘平住家と平右衛門、越路の山科におかるなりしが、四月廿二日より、越路は病氣にて、凡そ二週間休業せり、されど時節のよき爲め非常の大入にて、打續けたれば、五月六日より再び出勤して同十五日打揚げたるが、此日數實に七十四日間、三十六年の攝津大掾披露の七十五日間に僅か一日不足のみ、而も其間越路の休業あり、いかに此興行が當てしかを見るべし。



五月は『狭間合戦』と『河原達引』と『御所櫻』にて、越路は中の堀川を勤めたり。此興行四十五日間に打揚げ、後直ぐ暑中休みとなれり。秋興行は九月十三日より初り前が『朝顔話』に切が『伊勢音頭』にて、越路の島田宿に津太夫の油屋は大受けなりしも、明年は菅公の一千年来に相当するより、天満神社にては其前より本社其他の大修繕を行ひ、いよく落成したれば、十月初めより正遷宮大祭にて砂持あり。北區はエライヤツチャの踊にて、毎夜の賑ひに人氣を奪はれ、十月になりては稍不入となりし折柄、引續いて四月十三日より第五回博覽會の地鎮祭あり、當時市内一般に不景氣に沈淪しつゝありし時なりしかば、當局者の差金にて、景氣挽回の一策として、市内總踊を催さしめたれば、老若男女有頂天になりて、市内を洋れ歩き、淨瑠璃どころの騒ぎにあらず。依て文樂にては十四日限

り打揚げたるが、此日數三十二日間。其月中休業して後は十一月一日より『先代萩』に『恨鮫鞘』、越路は前の『御殿』を勤め、鰻谷は津太夫なりき。此興行四十日間にして、年内を打揚げ、十二月十一日より歳末まで休業せり。三十五年一月二日より『信仰記』、『曲文章』、『染分手綱』にて、前は染の芥子畑、文字の花子と、鳶田の二段に、呂太夫の天下茶屋、津太夫の切子別れ、越路は中の吉田屋を勤めたりしが、此『曲文章』は後にも記したる如く、曾て江戸にありし時語りしのみにて、四十年振り文樂にては初役なり。人形は玉造の喜左衛門に、玉助の夕霧、紋十郎の伊左衛門にて、髣髴近松時代を想見せしめ、結構此上もなく、越路の語り物中最も珍とする所なりき。日數四十一日間。次は三月一日より『嫩軍記』に『岸姫松』と『桂川』にて、呂の熊谷陣屋、津の帯屋に、越路の飯原兵部屋敷なりき。此興行は四十一日間。四月は

百五十二  
十八日初日にて前が『大江山』中が『歌祭文』に切が『吃又』にて津の人身御供越路の野崎村に文字の土佐將監なりき。四十日間。六月六日より季節もの、『夏祭』と『和田合戦』と『千兩幟』にて呂の三婦内津の團七内に越路の市若切腹。掛合は猪名川が染鐵が嶽が文おとわが文字太夫なりき。此時は日數二十八日にて暑中休みとなりぬ。秋興行は九月十七日より初り狂言は『布引瀧』に『阿波鳴戸』に『蝶花形』なり。染の木曾先生に呂の九郎助住家津の鳥羽離宮に越路の十郎兵衛内文字の『小阪部館』なりき。三十四日間。十一月一日よりは『双蝶々』、『三代記』、『天網島』にて染の米屋喧嘩呂の橋本津の引窓越路の三浦別れと文字の紙治内にて此興行三十四日間。三十六年一月は春太夫の改名披露前に記したれば畧しつ。三月二日より『二十四孝』に『河原の達引』にて染の信玄館津の勘助住

家越路改め春太夫の十種香に文字改め越路太夫の堀川なりき。日數は五十六日間。次は五月一日より攝津大掾披露の興行詳細は前にあり。此興行七月十五日打揚げ暑中休暇となり越路は須磨の別荘に避暑せり。是れまでは京都もしくは神戸等據なき招聘に應じて五六日の興行をなさゝるとなかりしも此年より老年の故を以て辭して應ぜず。秋興行は九月中旬との事なりしが此年は非常の大暑なりし爲め延引し同三十日初日にて狂言は『染分手綱』と『桂川』なり。是より先き豊竹呂太夫は病氣にて當一月以來休場して又前興行より竹本大隅太夫出座するとなれり。役割はむらの興作勘當に染の訴訟能の段が定之進大掾左衛門染重の井越路協僧叶つばめにて津の沓掛村越路の坂の下に南部と源子の道中双六大掾は子別れを語り大隅は帶屋なりき。此興行三十日間にて打揚げ次

は十一月十一日より初まれり。これ三十六年の最終の興行にして、又最近の興行なりき。今其番附によりて座員の重なるものを舉ぐれば實に左の如し。

前「繪本太功記」  
大徳寺 焼香 送り

外題

切「傾城反魂香」  
将監館 と道行

三味線

竹本攝津大掾  
竹本津太夫  
竹本大隅太夫  
竹本染太夫  
竹本むら太夫  
竹本七五三太夫  
竹本越路太夫

野澤吉兵衛  
豊澤猿糸  
鶴澤清六  
豊澤廣作  
鶴澤勇造  
豊澤仙昇  
野澤吉彌

竹本南部太夫  
豊竹司太夫  
竹本文太夫  
豊竹時太夫  
竹本叶太夫

鶴澤寛治郎  
鶴澤朝太郎  
鶴澤勝鳳  
鶴澤大三郎  
鶴澤三四  
鶴澤玉助

人形

桐竹紋十郎  
吉田玉助  
吉田助太郎  
吉田玉治  
吉田玉治  
吉田榮三

吉田三吾  
吉田玉造

右の如き顔觸にして役割の一二を擧ぐれば本能寺はむら太夫清  
水長左衛門切腹は染太夫妙心寺若が七五三太夫鷺の森は津太夫  
尾ヶ崎が攝津大掾大徳寺焼香が越路切の將監閑居が大隅太夫等  
にして人形は妻操と吃又平の二役が紋十郎阿野局鈴木孫市光  
秀に雅樂之介の四役が玉助蘭丸久吉四方天妻雪の谷に鷹使ひ  
の五役が助太郎重次郎長左衛門佐久間中川雷りの五役が玉治  
春永初菊柴田女房おとく壽老人の五役が榮三松田太郎左衛門  
皐月鈴木飛驒守の三役が玉造なり。此興行歳末に接近したると攝津大掾が十一月廿一日より病氣に  
て休業せしとにて、兎角はかゝしからざりしかば、十二月に入り  
六日打しのみにて千秋樂を告げぬ。最も大掾の病氣は聽て快復

したれば、十二月四日より出座したるも、僅に三日間勤めしのみ  
て年末休みとなりぬ。此興行二十六日間なりき。之を要するに攝津大掾の藝人としての生涯は、彼れが二十歳の頃  
に始り、師匠吉兵衛に従ひて地方興行より東京に従ひ行き、習練の  
功を積み、文久三年彼れが二十八歳の時より、春太夫に就きて更に  
技藝を研き、明治三年十月彼れが初めて切語りとなりたる三十五  
歳までは、修業時代なり。明治四年より十年五月興行に、師春太夫  
に代り、「忠臣蔵」山科の段を語りし時までが、自修時代とやいふべ  
き。即ち前の修業時代には、一に師の教によりて、藝道の形式を習  
ひ、後の自修時代に至りて、自ら工夫發明して、其蘊奥を究めたり。  
爾來ますます、其藝の發達すると同時に、段段圓熟の境に達し、今に  
至るも殆ど退勢を見ず。唯近來道に年の故を以て、其聲にや、肉  
の落ちたる憾はあるも、而も其肉の落ちたるだけそれだけ、一方に

は寂を帯び、趣味加はりて、却て入神の妙境ありと稱せらる。昔の名人上手と稱するも六十、七十歳の高齢まで勤めたる人乏しからず。師匠春太夫の如き、明治八年一月文樂座を退座したるは、實に六十八歳なりしが、其時は既に餘程老衰の境に入り、今日攝津大掾の元氣にして、其語り口に殆ど老年の体の見えざるとは同日の論にあらずといふ。(春太夫は同十年更に出座したれども、其時は最早彼れの一世代なりき。)

なほ序を以て、現今大掾の三味線を弾きをる、五代目野澤吉兵衛に就て一言せん。既に述べ來りし如く、大掾は實に三代目吉兵衛の教へ子なれば、野澤家とは因縁最も深し。然るに團平去り、廣助老ひて、太夫に名人の追々跡を絶つと同じく、三味線にも名人と稱すべきもの實に拂底の世となりしが、なほ此吉兵衛の如き名手ありて、三粒の古流を傳へ、大掾の演藝をして遺憾なからしむ。吉兵衛

は初名野澤吉次郎、讃岐の産にして、竹本泉太夫の養子なり。三代目吉兵衛の末弟なりしが、師死去の後、四代目吉兵衛に就て練習す。若輩の時より既に頭角を顯す。明治三年野澤吉彌と改名し、諸所の芝居に出勤す。四代目吉兵衛死去したるを以て、明治十四年五代目吉兵衛を相續し、同十七年九月團平の文樂を去るに當り、代つて越路を弾くとなり、其後一度中絶せしとありしも、再び舊に復りて今に至れり。

なほ攝津大掾と文樂座との關係に就て一言すれば、慶應二年三月初めて同座へ出勤して以來、殆ど他座へ出勤したるとなし。勿論暑中もしくは年末休み等に、諸所の端興行及び東京行きは別として、最初同座主の文樂翁に愛せられ、爾來同座の信用は益々重く、師匠春太夫の如き、屢々出て屢々入り、明治八年遂に文樂と衝突して物別れとなりし時の如きも、彼れは獨り文樂に止り、新たに彦

六座の出来たる時も、他の者は同座に投ずるもあり、團平の如き其一人なれど、彼れは遂に動かず。今日にては文樂の大掾か、大掾の文樂かを知るに苦しむまで密接の關係を生ずるに至れり。蓋し此關係は兩者相俟て然りしものにて、所謂水魚も音ならずとやいはん。他の人々が屢々入り屢々出るもの、其内情を洗へば皆金錢に關せざるはなし。然るに大掾は金錢に淡泊にして、曾て給金に就て彼是いひし事なしとは其筋の者の公言する所にして、彼れの門弟は又いへらく、師匠は徳徳に關せず、唯出て下さいといへばニコくしてゐられますと。斯の如くにして大掾は藝以外に文樂座に重視せられたる所頗る多きを知るべし。春太夫時代の番附を見るに、終には彼れも文樂の櫓下に据りしも、出入の頻繁なる爲めに地位はいつも可からず。然るに大掾は藝も素より勝れたれども、少しも文樂を離れざる點よりして、文樂に於ては早く好地位

を占めたるなり。されば彼れと同輩のものは、彼れを一の目標として打突り、それに同化すればよし、同化せざるものは不平を以て去るといふ有様にて、彼れの文樂に於る根據はいよく固くなりぬ。即ち大掾は文樂に依つて地位を作り、文樂は亦大掾に依つて今日の繁昌を持続すといふべし。今や名聲四方に響き、光榮の身に餘るものあり。所謂功成り名遂げて身退くの場合、自らも深く覺るところあり、又客筋よりも屢々退隱を勧めらるゝより、一度はそれと決したるも、醫家の如きは又自ら見所を異にし、力士が相撲を休業して急に身軀の弱るが如く、大掾の如きも閑散に就く日は、或は老の俄に襲來する時なるやも知るべからずといひ、世間は寧ろ彼れに對しては酷なるも、大掾の如き未だ老ひたりといふべからず、一身の安きを願ふとなかれ、われはなほ數年彼れの淨瑠璃を聞き、其美音に飽かんといひ、又彼れの門弟等は切りに師の

退隱を惜み、眞情を吐露して、藝道の爲めになほ暫く止り、其蘊奥を傳へんとを請へり。されば大掾も四圍の事情黙止し難く、一旦決したる退隱の念を翻して、なほ暫く文樂に出座して、藝道の爲めに盡すとなれりといふ。

其廿一 彼れの藝談

今の藝は浮氣△長門太夫の湯を呑む印△岡太夫の豪放論△音聲以外に語る術

歌舞音曲何に限らず、凡そ一藝に達し、名人上手といはるゝ程のものは、何處か常人と異るところありて、平常の心掛より、藝道に對する熱心之を修業するに就ての苦心鍛練及び工夫は必ずや後人の模範とすべきものあり。曾て富樫柳水氏の「藝人巡り」△大阪毎日新聞「所載」を見るに、其内に「竹本越路太夫の談話」あり。近頃著者が攝津大掾に親しく聞きし所と毫も異ならず、依て之を參收し、其大

要をこゝに摘記すべし。彼れ曰く、

誰でも能いふとてすが、凡て藝道は昔から見ますと、浮氣な風になりました。第一修業が昔しとは違ひます。尤も世の中がせゝこましくなりましたから、でもございませうが、私共の文樂に入つた頃は、軽い役でまだお客様が来るか来ない内に済んで仕舞ます者でも、仕舞まで残つてゐて、先輩の語る所を聞いてをる。又先輩が病氣やなぞ不意に出ぬとでもあれば、其代りに出るのが面目でもあり、又之が實に出世の端緒にもなるのですから、誰も之を狙つて代りとなるイヤ、己が出るイヤ、己だと奪合をして先に出た者を引摺り下すほどの熱心なものでした。が、今の者は如何です。誰が代りをと、いふと皆尻込をして、コソコソ逃します。實に然り、近來の藝人に名人上手といはるゝものは、維新前に於て大修業をしたるものか、或は其頃の大師匠に仕込まれたるものか、

此二途の一を出ず。歌舞伎にても團十郎、菊五郎の名優たりしは、其天才の興るところ多しと雖ども、一は其修業即ち歌舞伎役者たるべき教育を充分に寧ろ嚴酷に受けたるに因らずはあらず。人形浄瑠璃にても、玉造の如きは古名人の衣鉢を傳へたるものにして、太夫にても大隅の如き、實に團平仕込の然らしむる所なり。攝津大掾の今日あるを見て、單に天性の美音に歸するは誤れり。吉兵衛の仕込みは寧ろ酷に過ぎたれども、今日の大成は其聲の美に修業の功を積みたる結果に外ならず。然るに今の者は、此大修業をなすもの殆どなし、是れ名人上手の出でざる所以にして、今日はなほ昔しの名残を留めざるも、此一二名人の世を去るの日は即ち此の舊來の藝道の全く廢滅に歸するの日なり。越路又曰く、凡て此藝道といふものは、何藝に限らず其道に入つて見ると、一つとして無雜作のものはありません、又其道々の上手とか名人

とか云はれる呼吸は、遣り方こそ違へ皆同じとてすが、此浄瑠璃は其中でも先づ六ヶ敷い方です、何故といひますと芝居ならば譬へば忠臣蔵の由良之助をして、判官とか九太夫とか、夫々相手がありますから、つまり其相手に對する役柄を呑込み、自分だけのとをすれば可いのですが、私の方は由良之助も判官も九太夫も顔世もおかるも皆一人で遣て而も其氣合は皆それ々に變てをります、されば忠臣蔵を語れば誰も彼も一人で持切るのて、由良之助と判官が能出來ても九太夫が悪かつた時には、其浄瑠璃は旨く語れたとはいはれません、勿論語りものゝとて、それから節廻しの加減も大事ですが、又浄瑠璃の内的人物の一句一言其詞を能く語り分けねばなりません、それには心入といふとが大切でございませぬ、如何なる藝を習ふにも熱心即ち人に誠の心がなくては覺はるものではありませぬ、私も先年人から勧め



百六十六  
 られました。神道黒住教に入りました。いらく教へも承つてゐ  
 ますが同教の有力家に大國高政といふ人があつて、其人の歌に  
 「天地も動すものは人毎に、持て生れし誠なりける」といふのがあ  
 ります。是が實に藝道の極意だと思はれます。若し人に此誠とい  
 ふとがなかつたら、何を致しても他を動かすとは出来ません。さ  
 昔より名人上手といはれるものも皆同じ人間であるから、さう  
 普通の人より立勝つた所かあるう筈はありませんが、唯名  
 人上手は平常の心入が違ふ。即ち名人上手の藝には誠が籠つて  
 ゐます。聲がよくても節廻しがよくても誠がなければ他を感動  
 するとは出来ませぬ。能く誰でもてすが此所は六ヶ敷いの彼所  
 は容易いのと、語り場所の難易に依つて力を入れたり入れな  
 かつたりしますが、斯いふ風では隙が出来ます。それゆゑ六ヶ敷い  
 所では遺損なひは少ないが、是非容易いところで失敗をするの

百六十七  
 は丁度樵夫が高い所からは落ちぬが、低い所として墜落す  
 るとがあるといふ話と同じで、氣の抜けた時に何事でも失敗  
 するものと見えます。是等は吾々藝人の尤も心得てをるべきと  
 て、一段を語り出した以上は節廻しの難易、人物の立物と端物と  
 を問はず、一言一句に満身の力を入れて語らねばものになりま  
 せぬ。ですから合方の三味線に長い合の手があつて、少し息を吐  
 ふと思ふやうでは、モウ氣が抜けて駄目です。こゝは幾ら休む暇  
 があつても、ズーツと息を下ッ腹に籠めて、氣合の抜けないやう  
 にしてゐなければなりません。素人方にはお氣も附きません。ま  
 が、語ります内には白湯を呑むところがあります。彼れも唯咽喉  
 の渴いた時に呑めば好といふ譯のものではないので、縦や三味  
 線の合の手で聲を休める所がありました。氣合の抜る爲に呑  
 まない所が幾らもあります。白湯を呑む所は一段に、何所其所と極

りがありまます私わたくしが先年故人長門太夫此人は御存知の通り義太夫以来の名人といはれた人ですが此人の本を見た時に其本の中に〇〇の印の附してある所がありましたから是は妙だといろく考へたところが此の〇〇の印は白湯を呑む所なので道に名人といはれる人だけに細かい所まで注意をしたものだと感じ心を致したとがありましたが總して淨瑠璃を語るに此氣合の大切などは今私が事新しく申迄もないとて是は太夫ばかりでなく相手の三味線弾もやはり此心得を持てゐなくてはなりません太夫は聲を發する三味線も此時息を詰めてテンと受ける此一呼吸で淨瑠璃が語るので是を考へると團平は實に名人でした幾ら手を休めても氣合を抜きません第一彼の年をしてても少しも衰へるとがなく藝は益々進むばかりでした先づ彼あいふ人は今後モウ到底出來ますまい實に三味線に生れ付

いたといふものです。又藝道に慢心といふ奴は禁物だといひますが誠にさうで此奴に見込まれたら最期モウ藝の發達進歩する望がないとはいへ藝人には又自信がなくてはなりませんこんな語りやうをしては御見物に生意氣だと云れやうかなど取越苦勞ばかりしてゐては到底何事も駄目です又自分が常に下手だくと卑下してばかりゐると藝が縮まつて少しも伸びぬ此自信があるので大勢の眞中へ出て得意に語れるのですがしかし自信と高慢とは誠に能く似て全く非なるもので世には高慢を自信と思ひ違へてゐる人が澤山ある斯いふ人は兎ても望はありません私共の修業盛りの頃岡太夫と云ふのがありました此人もなかくの名人でしたが平常私共に教へるのに淨瑠璃は下手に語れといふのですどういふ譯かと聞て見ますと上手に語ると其語物の

出来が器用過ぎて小さくなる、下手らしく呑込の悪い人に嘸を  
 するやうに語れと申しました、兎角習ひはじめには巧くくと  
 思つて細工をするのが多い名人となつてからは別と致し、初心  
 の内は何んでも後生大事に型を頼さず、大様に語るとを教へた  
 のでせう、淨瑠璃も語りものですから、聲が好くなくてはならぬ  
 とは申すまでもありませんが、併し強ち聲にのみ依頼するもの  
 ではありません、私どもの存じてゐます若、太夫などは、實に聲の  
 ない人で、したたがなかく、巧いとを語りまして聞いてゐると何  
 ともいへぬ味がしました、ツマリ術で語るのです、武士が人を斬  
 るに三尺の大刀でも一尺二寸の匕首でも、同じ手際に使ふのと  
 變りませぬ、淨瑠璃も小音、悪聲だからと云て、決して輕蔑は出来  
 ませぬ、聲が悪くても名人上手はいくらもありません、が此淨瑠璃  
 の聲ばかりは不思議に大阪でなくては出ませぬ、以前は凡そ藝

といへば此大阪が本家でありました、が近頃は悉く其株を東京  
 に奪はれました、唯一ッ此淨瑠璃だけが東京では修業が出来ぬ  
 只今東京で語つてゐるものは大概大阪仕込みです、是は又妙で  
 す。  
 俳優と太夫との難易に就ては今容易に首肯し難き節あれど、追に  
 名人だけありて、平常の其心掛には常人の遠く及ばざるものあり。  
 音聲の美惡に就ての説は、彼れが卓抜の美音家だけに趣味の最も  
 深きを覺ゆ。若し彼れにして眞に其聲のみに依頼せしならん、に  
 は彼れは到底今日の地位に至るを得ず。彼の天性美音にして、聲  
 以外に淨瑠璃を語るの術を知る。鬼に鐵棒の譬へに洩れず。而  
 も此術を粗畧にせざりしは、彼れが強き自信を有しなから、少しも  
 高慢臭き所のなかりし爲め、先輩のいふ所を一々服膺して、己が技  
 藝を研く材料に供したるに依るべし。

其廿三 語り物の種類

△最も得意の語り物△彼れの長所と短所

攝津大掾の語り物は、ほゞ師匠春太夫の語り物と等しく艶物を専とせり。そが中にも最も彼れが得意として世に知られたるは「先代萩」の「御殿」「中將姫」の「雪責」「二十四孝」の「十種香」「朝顔話」の「島田宿」「合邦辻」の「合邦住家」等にして、今文樂座に於る是等十八番もの、度敷を調ふるに「先代萩」は明治六年二月興行を初めとし、最近興行卅四年の十月までに都合十度勤めしを最も多きものとせり。次は「中將姫」にて九度初めは京四條南座にて文樂一座の、六年八月興行にして、最近は卅三年の三月なり。「二十四孝」は五年三月興行にはじまり、卅六年三月までに八度「朝顔話」は五年九月より、卅四年九月までに八度「合邦」は稍少くして六度はじめは八年八月にあり、最近は卅三年の十一月なり。以上は攝津大掾が最も得意の語り物と

して好んで多く出したるもの、又立物の地位よりして屢々語りたるは「忠臣蔵」の「山科」なり。其數六度初めが十年五月にあり。既に記したる如く、春太夫が病氣にて最早勤まらぬと決したる時より、其役を引受けたるものにして、素より大掾の如き之を語りて拙き所を發見せずといへども、其聲と質よりいへば決して彼れの得意の語り物とはいふべからず、即ち立物の役目として寧ろ屢々語りたる物といふべきか。

「菅原」の「松王首實驗」の如き、「太功記」の「尼ヶ崎」の如き亦多少これに類するものあり。「菅原」の如きは八年一月より卅四年一月興行まで、に前後合せて七度「太功記」は十一年九月より、當興行即ち卅六年の十一月までに五度を勤めたり。しかし以上は彼れが得意の語り物たるとは疑はず。之に次ぎ稍得意の語り物は「阿波鳴戸」の「十郎兵衛住家」これが六度。「伊勢物語」の「春日村」「岸姫松」の「飯原兵